
邪神のディープ・キス ～ワンダーランドは眠れない～

雷都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

邪神のデープ・キス ～ワンダーランドは眠れない～

【Nコード】

N4800Z

【作者名】

雷都

【あらすじ】

舞台は、眠りの世界である【ワンダーランド幻夢郷】と、覚醒の世界である【モノトニーランド幻滅郷】の、ふたつに分けられます。

ワンダーランドのアリスが生み出した邪神を、モノトニーランドに暮らす高校生の「国広太一（主人公）」が退治する。
というのが、大まかな筋です。

邪神を倒すべく戦う太一ですが、彼自身もまた、邪神「クトウル」

の力を秘めていました。

そして、クトウルー（タコ）としての力をすべて引き出すために、ワンダーランドにいた八人の少女と契約しなくてはならないことを知ります。契約の方法は、「女の子とキスすること」。

かくして、八人の女の子と契約をすることになった太一。人間と邪神のはざまで葛藤しながらも、太一は仲間を守るために、他の邪神と戦うことを決意します――。

プロローグ（前書き）

タイトルからおわかりになるかと思いますが、クトゥルー神話と不思議の国のアリスを、混ぜあわせたような世界観になっています。

ちなみに作中では、「クトゥルー神話」および、「不思議の国のアリス」という作品は存在しません。そのことを念頭において、お読みください。

両作品を知らなくても、楽しめる話になっています。

プロローグ

人の意識が届かない幻夢郷【ワンダーランド】で、少女の魂がさまよっていた。

眠りの世界では、彼女は何にでもなれた。

万物の根源——少女観念体【ヨグ・ソトース】だった。

彼女は何にでもなれる。それ故に、彼女は何者でもなかった。

偏在しながらも、孤独である少女の魂に、ある男が近づいていく。

眠りの深淵にもかかわらず、男は意識を保っていた。

彼は少女の魂へ物語る。

それは、『アリス』という少女が、不思議の国を遍歴する話。

明晰夢のように、素敵なお伽話だった。

はじめは警戒したものの、少女の魂は、男の話を食い入るように聞きだした。

しかし。

『アリス』が赤の女王に追われるシーンで、男は口をつぐんでしまった。

「ねえ。それからどうなるの？」

少女の魂は、続きを催促する。

男は答えずに、ゆっくりと手を差し伸べた。

そして、ありったけの可愛さと、わがままを込めて。

少女の魂に実体を与えた。

「物語の結末は、君が見つけてごらん」

再び口を開いた男は、少女観念体【ヨグ・ソトース】から生まれた女の子の、名前を呼んだ。

「——アリス」

男が去った後。

アリスは、幻夢郷【ワンダーランド】を独立国家にした。好奇心を満たすために、ひたすら不条理な法律をつくった。陽気で愉快的仲間たちと、宴を楽しんだ。

アリスの物語は、ハッピーエンドを迎えようとしていた。だが。

覚醒世界に住む者たちが、彼女の物語を書き換えていく。目覚めたまま、夢を犯した。

アリスに淫らな妄想を押し付けた。

少女の体は、気持ちよくなる道具に変えられた。

幻夢郷【ワンダーランド】は腐敗し、暴力と放蕩がはびこった。それは、欲望だけの革命だった。

独裁者の権力を、アリスは失った。

瀟洒なドレスの下で、柔らかい肉体が震える。

『何故……』

私の痛む顔を、そんなにも悦ぶの？

如何して……』

私から滴る血液を、そんなにも嗤うの？』

夢で生まれた少女は、自分のいる場所が悪夢だと知った。

押し込められた劣情に、アリスの体は白く潤る。

だが反面、涙は枯れていた。

かつて流した涙の池は、泥濘となった。

仲間たちは、目覚めの世界へと逃げていった。

夢の世界の果てで、独りきりになったアリスは、覚醒の世界を憎んだ。

赤児のように泣いた。

それは、虚ろなフルートの音色に似ていた。

ゴボリ。ゴボリ。

アリスの白い肌が、青黒く泡立ち、膿んでいった。

膿は、臓物を煮詰めたような臭気を漂わせた。

「――復讐よ」

体を覆う膿に、アリスは命令する。

「復讐しなさい！ 覚醒の世界に生きる者どもの、皮を削ぎ、爪を剥ぎ、肉を焼き、骨を削り、眼を磨り潰して、脳に悲鳴を流しこむのよ！」

彼女の声に、従うように。

泡のなかからは。

ゴボリ。ゴボリ。

名伏しがたき肉塊が、産まれ落ちた。

肉塊は雄叫びを上げ、異臭を放ちながら、奇怪な姿で動き出す。

邪な神が誕生した瞬間だった。

誰もいなくなった幻夢郷【ワンダーランド】で、闇が祝福していた。

腐った肉のこすれ合う音が、互いの福音となった。

アリスは決意した。

少女という、自らは語りかけぬ受動と呼ばれた肉体で。

いま、総てを物語る。

暗黒神話の大系を、語り尽す。

「出てきなさい！ 私の邪神【ぬいぐるみ】たち」

アリスに込められた、自分を陵辱した者たちへの怒りが、憎しみが、恨みが、吐き気が、殺意が。

膿から這い出る。

異形たちが、とどまることなく溢れてくる。

アリスは、産み落とした邪神の群れを見渡して、晒っていた。

（もうすぐ、愚かな覚醒の民は気づくでしょう）

真実は捏造されていたと。

「すべての価値観は、反転するわ。真の理とは、

驚異こそが平常で！
瘴気こそが定常で！
病理こそが健常で！
猟奇こそが、正常なのよ！
そして……」

アリスは、眠りと覚醒の境界を、見上げながら続ける。

「浅瀬に戯れるものが、最も深い闇を知り！
優雅に羽撃くものが、最も重い罪を負い！
無垢に微笑むものが、最も鋭い齒を隠し！
覚醒に暮らすものが、最も脆い生に縋っているのよ！」

アリスの叫びを皮切りにして。
邪な神たちの哄笑が、次元を超えて響きはじめた。

第一章・その一

朝起きたら、俺の目の前に、気色悪いバケモノがいた。

ヘドロのようにぐちゃぐちゃしたバケモノは、「テケリ・リ」といった感じの、この世のものとは思えない声で笑った。

「なんだ。こいつは」

俺は試しに、デコピンをかましてみる。バケモノは見た目どおり柔らかく、俺が弾いた指は、ヤツの体へとめり込んだ。

「テケリ・リ！ テケリ・リ！」

バケモノは叫びながらのた打ち回ると、消えた。

「……どうなってやがるんだ」

俺はベッドから起き上がり、バケモノがいた場所を確認してみる。ヤツの痕跡はどこにもなく、ただ俺の頭の奥に、耳障りな笑い声が残響しているだけだった。

朝っぱらの怪現象。だが、異変はそれだけじゃない。

寝ている間に枕へ垂らした、俺の唾液が、真っ黒だったのだ。

「まるで墨みたいだな」

俺は、枕のシミを見ながらつぶやいた。やはりこれは、俺の仕業なのだろうか。

試しに、手の甲をなめて確認してみる。

透明だった。

そりゃそうだ。唾液が黒いはずがない。

（寝ばけてるんだな。俺）

バケモノも、黒い唾液も、なにかの見間違いだろう。俺は自分をそう説得し、階下へとむかった。朝食の準備をしなくてはならないのだ。

幼いころに母さんを亡くした俺は、親父と妹の三人で暮らしている。が、このふたり、超がつくほどの料理ベタだった。とても人が食べられるものではない。

よって消去法的に、俺が料理をまかなうことになっている。

焼き魚に白飯、豆腐とワカメのみそ汁という、平凡な朝食をこしらえていると、親父が起きてきた。よそったばかりの白飯を、一口つまみ食いする。行儀の悪い男だ。

「おい太一。米は柔らかめに炊けと言っただろう」
「うるせーよ」

行儀悪いうえに、ダメ出しとは。我が親父ながら、いい度胸していやがる。

「嫌なら食うな」

俺はそう吐き捨て、料理の続きにとりかかる。

「ふえ〜ん。ママ、太一がいじめるよぉ〜」

甘えた声をだして、親父が奥の間へと走っていく。奥の間には、親父が作った母親の等身大ドールがある。

立体造形師である親父は、人としては最下層だが、造形の腕だけはたしかだった。遺影の代わりに製作した母さんのドールも、かなり精巧につくられている。もっとも、俺には、母さんの記憶があまりないのだが。

「ママ。太一がいじわるするよぉ」

「悪かったよ。見苦しいから、やめてくれ」

母さんの人形にすぎる親父があまりにも哀れだったので、俺は謝った。まったく、世話の焼ける人だ。

「お兄ちゃん。おはよう」

眠そうな目をこすりながら、妹の蓮も起きてきた。

「ああ。さっそく飯にするぞ」

魚が焼けた匂いが、リビングに充満していた。

「いただきます」

家族そろって、手を合わせる。俺たちはいつも三人で食事をとる事になっていた。「ご飯を食べるときは、みんな一緒じゃなきゃだ！」という、親父の方針によるものだ。

まあ、家族で食事することに異論はないのだが。

妹の食生活を見ると、なんだか食欲がなくなってしまう。

「……なあ、蓮。たこわさばかり食うなよ」

「うゝん」

「たこわさが好きなのはわかるけど、魚も食べよ。せつかく焼いたんだし」

「うゝん」

「朝からたこわさを貪り食う女子中学生を見てたら、一日の活力がなくなるよ」

「うゝん」

生返事をくり返すだけで、ぜんぜん聞く耳をもたない。ダメだこりゃ。

「蓮が食べないなら、お父さんもらっちゃうぞ」

親父が、蓮の焼き魚を奪う。意に介さず、たこわさから顔を上げない妹。

見慣れた光景だった。

食事を終え、俺は洗面台で歯を磨いていた。

すると、またしても異変が起きた。

「テケリ・リ」

バケモノが現れたのだ。

寝室で見たバケモノとは、少し違うような気もしたが、腐った水あめみたいな体は共通で、やはり気持ち悪かった。

しかも、磨いていた俺の口のなかは、真っ黒な泡だらけになっていた。

「見間違いじゃ、なかったのか」

俺の体はどうかしてしまっただけらしい。

とりあえず、口中の泡をすすいでから、洗面台に付着した黒い液体を洗い流す。こんなところを蓮にでも見られたら、ややこしいことになる。俺は、唾液が黒いという証拠を、必死になって隠滅していた。

「テケリ・リ」

慌てふためく様子がおかしかったのだろう。バケモノは、俺を見ながら笑っていた。

とくに眼球らしきものも口らしきものもあるわけではないが、バケモノは確かに、俺を嘲笑していた。

「お前の愚行、万死に値するぞ」

バケモノへ、指を鳴らしながら近づいた。俺は、バカにされるのが何よりも嫌いなのだ。売られた喧嘩は買い占める。相手がたとえ、ヤクザだろうと、バケモノであろうとだ。

デコピンの餌食にしてやる。

「失せろ」

弾いた俺の指が、バケモノを粉碎する。

「テケリ・リ！ テケリ・リ！」

寝起きのとおり同じように、ヤツは奇っ怪な声をあげ、跡形もなく消えた。

ふん。

なんだかよくわからんが、俺をバカにする奴は、あの世で反省するんだな。

「ねえ、お兄ちゃん。何やってんのー」

蓮が、ドアを激しくノックした。

「早く出てよー。遅刻しちゃうよお」

「悪い。ちよっと待ってろ」

俺は鏡で、口のなかを確認してみた。もう、唾液は透明に戻っている。おそらく、あのバケモノが近づいてくると、黒くなるメカニズムなのだろう。

俺は、なにともなかったかのように、扉を開けた。

「なにやってたの、お兄ちゃん」

「ちよつとな。バケモノがでたんだ」

「……え？」

「なんか、黒いナメクジが何百匹も集まったような、変なヤツだ」

「やめてよそういう話！ お兄ちゃん、レンがお化け嫌いなもの知ってるでしょ」

蓮は泣きそうな顔で、怒った。

「本当なんだって。さっきまでいたんだよ、ちょうど蓮が立っているあたりに」

「もう！ 怖がらせないでよ」

「心配するな。俺が、デコピンで粉砕しておいたから」

「そ、それならいいけど……」

安心する蓮。

こいつは昔から、霊とかお化けとかいう類が苦手だ。靈感なんてなくせに。たいていこういう奴は、見えないものを想像しすぎて必要以上に怖がっているだけなんだ。俺もお化けらしきものをはじめて見たが、ちょっと気色悪いだけで、なんてことなかったぞ。

「つて、ホツとしてる場合じゃないよ！ 早く準備しなきゃ！」

蓮はバタバタと鏡の前に立ち、顔を洗いだした。

「じゃあ、俺は先に言ってるぞ」

「あつ。待って、お兄ちゃん……」

洗面所を出ようとした俺を、蓮が引きとめる。洗ったばかりのびちゃびちゃの顔は、なぜか神妙だった。

まさか、気づかれたのか？

俺の唾液が黒くなっていることに。

だが、蓮の一言は、俺の予想とは違っていた。

「……そのお化け、おでこあるの？」

「いや、ないけどさ。指で弾いたら、どこであろうとデコピンなんだよ」

「そんなものかな……」

蓮はいまいち納得していない様子だった。

なんだってんだ。急にまじめな顔をするから、ビックリしたじゃないか。

とにかく、俺の唾についてはなにもバレていないようだ。

俺は胸をなで下ろしながら、カバンを持って玄関へと向かった。
靴を履きながら、俺は考える。

（しかし、まさか唾液が黒くなるなんてな）

今のところ、人体に影響はないようだが、俺にとってはこれ以上ない悪影響があった。

唾液が黒くなるなんて、この国広太一には、あつてはならないことなのだ。

それはなぜかというところ……。

（キスが、出来なくなる）

たかがそんなことかと、笑うなかれ。俺にとってキスとは、レーゾンデートルそのもののものだ。

というのも、俺にはなぜか、子供の頃からキスに関する超絶テクニクがあった。近所の女の子を始めとして、その姉妹、あるいは母親、果ては幼稚園の先生や歯科衛生士にいたるまで。不意をついた俺のキス攻撃によって、メロメロにした女性は何えきれない。

そして俺は、『舌の曲芸師』とか『吸盤王子』とか、『キス神』とまで呼ばれるようになった。

もつとも。

俺のキスには自分でも怖くなるほどの催淫効果があるので、ここ最近は自粛していたのだが。

（唾液が黒いとなったら、キスの魅力も、激減するだろうな）

くそう、商売あがったりだ。

『キス神』の看板を、下げるはめになる。

「俺がなにをしたっていうんだ」

ペツ。なかばヤケになって、俺は庭に唾を吐き捨てた。

庭に広がる、俺の唾液は。

真っ黒だった。

第一章・その二

俺は悪夢を見ているのかもしれない。

もしそうだとしたら、いつかは覚めるだろう。

そんなことを考えながらも、とりあえず俺は、通っている「ルルイエ学園」へと向かった。

朝の通学路に、変化らしきものはない。嗚呼嚙町はいつもどおりだ。

おかしいのは俺だけみたいだ。

「おはようだよ。太一」

俺に近づき、あいさつをする姫カットの女の子。

幼馴染みの城座 実乃莉きのりだ。彼女とは、幼い頃からの付き合いがある。

実乃莉もいつもどおり、頭に赤いリボンをつけ、のんびりと微笑んでいた。

「ああ……おはよう」

できるだけ平常心を装いながら、俺はあいさつを返した。今はあまり口の中を見せられない。もごもごと、歯切れの悪いあいさつになってしまった。

「どうしたの、口をおさえて」

「いや……別に」

「もしかして、口臭を気にしてる？」

「ふっ。愚問だな」

俺は肩をすくめてみせた。

キス神と呼ばれた俺が、口臭の手入れを怠るわけがないだろう。しかしだ。唾液が墨のようになっていることがバレるよりは、いっそのこと、口が臭いと思われたほうがマシかもしれない。

黒い唾液をとるか、口臭をとるかで悩んでいると。

俺たちに向かってノラ猫が数匹、歩いてくる。

ここら一体の猫たちは、実乃莉になついていた。彼女からは動物を引き寄せるフェロモンでもでているのだろうか。猫たちはこぞつて甘えた声で鳴くと、彼女のふくらはぎに頬をすり寄せる。

「すごく、可愛いんだよ」

実乃莉は猫を撫でながら言う。

「太一も、撫でてごらんよ」

「いや。俺はいい。あまり気に入られてないようだからな」

「どうしてそう思うの」

「だって、ほら」

俺は猫たちの尻尾を指さした。

「こいつら、尻尾を立ててるぜ」

「太一に近い猫ほど、立ててるね」

「やっぱ嫌われてんだ」

「そんなことないよ。猫が尻尾を立てるときはね、甘えてるんだよ」

そうだったのか。てっきり、警戒しているのだと思っていた。

ちよつと嬉しくなった俺は、猫たちの頭を撫でてみた。

「ふむ。こうしてみると、案外かわいいものだな」

「でしょう」

俺たちが猫と戯れていると。

とつぜん。辺りが暗くなった。まるで夕暮れ時のように、灰色の闇に包まれている。

「なにが起きたんだ」

朝からハプニングつづきの俺は、もうなにがなんだかわからなくなった。

だが。慌てているのは俺だけのようだ。

実乃莉はというと、いよいよこの時がきたかとばかりに、覚悟の決まった表情になっていた。

「ついに、本格的な【星辰異常】が起きたんだよ」

「おい実乃莉。それはどういう意味だ」

わけのわからないことを言っている。長年つきそってきた無二の幼馴染が、遠くに感じられた。

「説明はあとだよ。とにかく今は、アイツを倒すことだけを考えて」
実乃莉が見上げながら指さした先には。

巨大なコウモリのような影が、俺たちを見下ろしていた。

「な、なんだ……あいつは」

「ナイトゴーストだよ」

実乃莉が言った途端。ナイトゴーストと呼ばれたそれは、俺たちに向かって急降下する。

ギリチンのように落下してくる巨大コウモリを、俺は間一髪でかわした。横に飛び、地面を転がる。

「実乃莉！ 大丈夫か！」

俺は起き上がり、実乃莉の方を見た。彼女は、ナイトゴーストの行動を予期していたかのごとく、軽やかにかわしていた。

「わたしは大丈夫だよ。でも、猫たちが……」

ナイトゴーストの一撃によって。

集まっていた猫たちは、惨殺されていた。アスファルトを赤く染める、動かぬ肉塊になっていた。

「なっ……」

俺が、見るも無残な光景に言葉を失っている。

シューウウウウ。

蒸発するように、猫は消えた。

「てめー。猫どもをどこにやった」

俺はナイトゴーストに問い詰める。だが、コウモリの姿をしたそいつには、顔がなかった。聞く耳も、話す口もなかった。

夜空を濃縮したような闇だけが、頭部を形づくっている。

代わりに、実乃莉が答えた。

「太一。残念だけど、猫たちは存在ごと消えてしまったんだよ」

「くそっ。せっかく仲良くなったのによ！」

俺は握り拳をかためる。このコウモリもときは、デコピンだけじ

や済まさねえ。

「猫たちに、地獄で詫びろ！」

ナイトゴーストに、全力で殴りかかった。顔のない頭部に拳がめり込む。

クリーンヒットなはずだ。

だが、手応えはまったくなかった。

「キュケエエエエ！」

耳をつんざく甲高い声を出しながら、ヤツは翼を振り払う。羽による攻撃をもろに食らった俺は、激しくふっ飛んだ。

「くっ……。なんてパワーだ」

俺は胸をおさえながら立ち上がる。打ちどころが悪ければ、内臓が破裂していたかもしれない。

「今のわたしたちのじゃ、アイツには勝てないよ」

実乃莉が、俺に耳打ちする。

「だからつてよ。素直に負けを認める気はねえぞ」

「もちろん。アイツを倒す方法は、あるんだよ」

「どうすりゃいいんだ？」

「こうするんだよ」

実乃莉は俺を抱き寄せると、キスをした。

なにをしているんだ。こんな緊急事態に。実乃莉はもう、俺の知っている幼なじみではなかった。

離れようとしたが、実乃莉は俺の首に手を回し、強く引きつけてくる。

唇が、舌が、絡みついていく。

「キュケエエエエ！ キュケエエエエエ！」

ナイトゴーストは飛び上がり、頭上で好色な金切り声を発していた。それでも実乃莉はキスを止めない。

みるみるうちに、実乃莉の体が黒く染まっていった。おそらく、俺の唾液のせいだろう。

彼女の白かった肌が、漆黒になったところ。実乃莉はポケットから、

一冊の本を取り出した。

「これは魔導書の『ナコト写本』だよ。太一に秘められたクトウル
ーの力を、引き出せるんだよ」

おお。なんか凄そうなものがでてきた。俺は不覚にもテンション
が上がった。

しかし、魔導書という魅力的な響きと、禍々しい表紙とはうらは
らに、彼女が開いたページは白紙だった。

「なんも書いてねーじゃん」

俺は、白いページをのぞきこみながら突っ込む。

だが実乃莉は、俺にかまわず魔導書のページを一枚ちぎって、宙
へ放った。

「ナコト写本よ。クトウルーの呼び声に応じよ。胸に輝くトラペゾ
ヘドロンに誓って、我に力を与えるんだよ！」

詠唱と同時に。

白紙のページは、瞬間に巨大化する。

さらに、実乃莉が着ていた服は消失した。

代わりに白紙のページが、彼女の体を包んだ。黒い肉体が、紙面
へ押しつけられる。

実乃莉を黒く染めていた俺の唾液は、たちまち、魔導書のページ
へと染みこんでいく。

無地だった魔導書のページに、女拓が完成した。

その途端。実乃莉は、まばゆい黒と白の光に包まれた。なにか大
きな力と力が、融合しているようだった。

光が鎮まると、魔導書の断片はどこかに消えていた。

中から現れたのは、すっかり変身をとげた実乃莉の姿だった。
ひらひらのドレス。

一回り大きくなったりボン。

そして、髪の毛が触手になっていた。

第一章・その三

「覚悟するんだよ!」

実乃莉は、ナイトゴーストへ向け宣戦布告する。

「この竜殺しの氷剣【ヴォーパル・ソード】で、切り裂いてあげるんだから!」

俺たちが隔離された、薄暗い空間に。実乃莉の啖呵が響きわたった。

彼女の右手には、二メートルほどの、巨大な氷の剣が握られている。

「わたしの邪技は、空気中の水分を凍らせて、武器を作り出すことなんだよ」

「それはすごいな」

まさか俺の幼なじみに、そんな技能があつたなんてしらなかった。しかし今は、あれこれ詮索するよりも、目の前の敵を倒すことが先決だろう。

実乃莉のかくし芸に、託すしかないようだ。

「キューケエエエエエ!」

またしてもナイトゴーストは急降下する。狙いは実乃莉だ。一直線に向かっていく。

「えいつ!」

気合を込め、氷剣を振り下ろす。だが、少し遅い。

ナイトゴーストは旋回し、直撃を避けた。右の翼を切り落とされながらも、残った左の翼で反撃する。

バシッ、という激しい音をあげ。

実乃莉が後方に吹き飛ばされた。空中を一回転していく。その拍子に、氷剣はこなごなに砕け、ダイヤモンドダストになった。

「実乃莉!」

「……わたしは、平気だよ」

みごとに着地すると、実乃莉は言った。ダメージは浅いようだ。一方、右の翼を切り落とされたナイトゴーストは、片翼をばたかせていた。再度、飛ぼうとしているのだろう。

だが、いくら羽ばたいても、ヤツの体が舞うことはない。

チャンスだ。飛行能力を失ったいまなら、ヤツを仕留められる。

——でも、どうすればいい。俺の物理攻撃では、ヤツに致命傷を与えることはできない。かといって、実乃莉の氷剣は折れてしまった。

なにかいい方法はないかと考える俺に、

「流しこむんだよ！」

実乃莉が、アドバイスした。

「おい。流しこむって、何をだ？」

「太一の唾液だよ」

それはあれか。このコウモリもどきに、キスをしろってことなのか。

「なんで、そんなことをしなきゃなんのだ」

「太一に目覚めたクトウルーの力で、あいつの邪な力を、相殺させるんだよ」

実乃莉の説明では、いまひとつ原理がわからなかったが、とにかくキスさえすれば、この窮地を抜け出せるようだ。

俺は、幼馴染の言うことを信じた。

ナイトゴーストへ、正面から近づいていく。

対峙したとき、俺は、もうひとつの問題を発見した。

「キスをしろったってよ……。こいつ、顔が無いじゃねーか」
しかした。

こんなことで、キス神と呼ばれた俺を、とめられるわけがない。それにさっきは、幼馴染にみすみす唇を奪われるという失態を、演じてしまったからな。汚名返上だ。

俺は暴れるナイトゴーストを抱きかかえると、顔のない頭部に接吻した。

闇のように黒いヤツの頭部に、同じように黒い俺の唾液を流し込む。コウモリもどきは俺の腕の中でバタバタと暴れた。ずいぶんとお転婆なヤツだ。

だが、俺の口づけからは逃れられない。

より深く、キスをする。なんとも言えない闇の味がした。濃厚で、むせ返るような死の香り。

きつと夜空を舐めたら、こんな味がするのだろうか。

俺は、喉が枯れるほど唾液を流し込んだ。はじめは暴れていたナイトゴントも、徐々に力が抜け、ぐったりする。

ヤツの体からは、闇が消えていった。それと同時に、俺たちを隔てていた薄い暗がりも、晴れていく。

暗闇はなくなり、今まで通りの通学路に戻っていた。朝の喧騒がよみがえる。

ナイトゴントは、俺の腕のなかで小さくなっていく。なにも映さなかった頭部が、可愛い女の子の寝顔に変わった。

ヤツは、コウモリの姿から、女の子になった。

「よくやったね。太一」

振り返ると、実乃莉が俺に微笑みかけた。彼女は、いつも通りの格好に戻っている。

いつもの制服。いつものリボン。そして、いつもの髪の毛だ。

窮地は抜けたらしい。日常を取り戻したんだ。

ホッとするも束の間。

ふと、腕のなかで眠る女の子を見て思う。こんなたいけな子どもに、俺はデープ・キスをしていたのかと。

それは一線を超えたことではないだろうか。もし、その瞬間を目撃されていたとしたら、俺の人生は終わる。

「安心していいんだよ」

俺の不安を見ぬいた様子で、実乃莉はいった。

「さっきまでわたしたちを包んでいた暗闇はね、【少女悪夢】（アリス・マリス）って言うんだよ」

「少女、悪夢……」

「少女悪夢で起きていることは、悪夢のなかにいる人たちにしか見えないんだ」

つまり俺たちの戦いは、通行人からは見えなかったということか。それなら安心だ。

とはいえ、少女悪夢から解放された通学路では、そろそろ人が動きはじめている。こんなところで、いつまでも童女を抱いているわけにはいかない。

「おい。起きろ」

俺は童女を揺さぶる。起きる気配はまったくくない。かすかに胸が起伏しているので、生きているのは確かだ。

彼女は、昏睡していた。

「まいったな」

「とりあえず、救急車を呼ぼうよ」

「いいのかそれで」

さっきまで、コウモリだった奴だぞ。この子が昏睡する原因を、現代医学で解明できるとは思えないのだが。

「大丈夫だよ。おそらく、脳の障害ってことで対応してくれるよ」

「なら、いいんだが」

他にいい方法があるわけでもない。ここは実乃莉の言うとおり、病院にまかせるのがベストだろう。

実乃莉がケータイをとりだし、119にかける。

「目の前で女の子が倒れたんです。病院までの搬送を、お願いします」

テキパキとこなした。ふだんはブーツとしているくせに、いざという時は機転のきく奴だ。

その後、すぐに救急車が到着し、女の子は搬送されていった。

これで一件落着、になるのだろうか。

遠ざかっていくサイレンの音を聞きながら、俺は思った。まだまだ、未解決な問題がたくさんあるような気がする。

「ん？」

ふと足元を見ると、小さな箱が落ちていた。一辺が５センチほどの、古びた立方体だ。

さっきの女の子が落としたのかもしれない。俺は念のため拾いあげると、ポケットにしまった。

しかし今日は、朝から奇妙なことが立てつづけに起きている。バケモノに襲われたり、幼馴染が変身したり、バケモノが女の子に変わった……。

それでも気が狂わず、理性を保っていられるのは、何事にも動じない強い心のおかげだな。俺はひそかに、強靱な精神力を自賛していた。

だが。

「ねえ太一。今日からわたしは……」

実乃莉の発言が、ついに俺の平常心を打ち碎いた。

「あなたの、足になるよ」

第一章・その四

な、なんだって！ 俺の足になるだど！？

それは一体どういう意味なんだ。俺は、その場で立ちすくんでしまふ。

「ほら。ブーツとしてないで。早く行かないと、学校、遅れちゃうんだよ」

先に、実乃莉が歩き出した。

彼女の後ろを、俺はあわてて追いかける。

完全に思考が止まった状態で、金魚のフンのように、実乃莉のあとについていくうちに。

ルルイエ学園に到着していた。

昇降口で靴を履きかえながら、実乃莉は訊く。

「ところで太一。さっき、何を拾ってたの？」

「……ああ。これだよ」

ポケットから、古く小さな箱をとりだす。さきほどは急いでいたのでよく見ていなかったが、箱の表面には、模様が刻まれていた。星のマーク、いわゆる五芒星というやつだ。

星の中央には、横に一本、傷が入っている。

「あの子のものだろう。あとで届けてやろうと思ってな」

古びた箱をまじまじと見ながら、実乃莉が言う。

「これは、あの子のものじゃないよ」

「なんでわかるんだ」

「とにかくこれは、太一が持つべき箱だよ」

一方的に押し返されてしまった。実乃莉はいつたい、何を知っているというんだ。

俺はしかたなく、箱をポケットにしまいなおしていると、

「よう、太一！ なにやってんだ」

背後から、ノーテンキな声が聞こえた。

陽気に肩をたたいてきたこの男。実乃莉と同じく、長い付き合いになる俺の悪友だ。

神世界 しんせかい 銀河 ぎんが という、アホみたいにスケールの大きい名を持っている。

「いや、まあ。朝からいろいろあつてな」

「いろいろつて、あれか。実乃莉ちゃんと、エッチでもしたのか」

オヤジのようなことをいう。考える内容のスケールは、小さい男だった。

「ところで太一。さっきの箱は、何だ？」

「なんでもないよ」

「婚約指輪か？」

「ちげーよ。バカ野郎」

銀河の頭を小突いてやった。奴はヘラヘラと笑っている。

まったく、俺は朝から修羅場をくぐり抜けてきたというのに。

「お前は、悩みごとがなさそうでいいよな」

「それがさあ。そうでもないんだな」

銀河は、急に暗い表情になった。

「俺の弟が、最近おかしいんだ」

うむ。失言だったな。どんな人間にも悩みはあるもんだ。いくら

バカな銀河とはいえ、悪いことを言った。

「弟が、どうかしたのか」

「アニメのキャラに、ハマってるんだ。恋をするほど」

「別にいいんじゃないか。今はそういうの、珍しくないだろう」

「それがさ。毎晩毎晩、抱きまくらに向かって、話しかけてるんだ」

抱きまくらか。それは、ビミョーな一線だな。

銀河が不安になるのも無理からぬことだ。少し事例は違うが、俺も毎日、人形に話しかけるダメな男を知っている。

俺からは良いアドバイスを受けられないと察した銀河は、実乃莉に話をふった。

「実乃莉ちゃんは、どう思う？」

「構わないと思うよ。恋愛の形は、人それぞれだよ」

「あら寛大」

心の広い実乃莉の意見に、銀河は安心したようだった。憑き物が落ちたように、弟の事情を話しはじめる。

「じつは今日ね。キャラの中の人に、会いに行くんだって」

「つまり、声優のことか」

「そう。ファンクラブの特典で、握手会に参加するんだ。これで弟も少しずつ、現実を取り戻してくれたらいいんだけど」

取り戻す現実の先が声優というのも、また危なっかしい気がしないでもないが、それは言わないでおいた。他人の趣味をとやかく言うような野暮なことはいらない。

「ふたりに相談してみてよかったよ。ありがとう！」

銀河は満面の笑みを見せると、先に教室へ入っていく。俺からは気の効いたことを言ってやれなかったが、奴の悩みは軽減されたように、何よりだ。

俺たちもすぐに、同じ教室に入る。

すると、実乃莉がそつと耳打ちしてきた。

「昼休みに、三階の会議室まで来てほしいんだよ」

ん？ 会議室だと。

あそこはたしか、うかがい知れない部活動の拠点になっていたはずだが。

名前は、えつと……。

だめだ。思い出せない。

実乃莉はそれ以上にも言わず、自分の席へと向かう。なんだろう。どこか不穏な感じがする。

重要な話でも、あるのだろうか。

第一章・その五

けつきよく。午前中の授業は、実乃莉の発言が気になり、集中できなかった。得意な数学も、あてられた問題を間違えるという、ヘマをやらかしてしまった。

吃音のはげしい数学教師が言う。

「め、珍しいですね。た、太一君が、ケ、ケアレスミスをするなんて」

おっしやるとおりだ。俺は見かけによらず、細かい計算が得意だというのに。

後ろの席からも、銀河がささやいた。

「太一、悩みでもあるのかよ」

「まあな」

「へえ。太一でも、悩むことがあるんだなあ」

銀河は、心底おどろいた様子だった。

お前にだけは言われたくないと思ったが、今朝のことがある。それに、嫌味でいつているわけではなさそうなので、デコピンをするだけにとどめた。

集中力は戻らないまま、昼休みをむかえた。そそくさと弁当を食べ終えると、実乃莉に言われたとおり、会議室へと向かう。

三階の、いちばん西側にある部屋。ここが指定された会議室だ。

「邪魔するぞ」

「やあ、待つてたよ」

実乃莉が出迎える。室内には、彼女以外に二人の女生徒がいた。そのうちの一人が、俺が見るなり勢い良く立ち上がる。ドリルのような縦ロールにティアラを載せた、いかにもお嬢様といった出で立ちだ。

「たしか君は、となりのクラスの練環ねりわさ……」

「黙りなさいよ」

ものすごい形相でさえぎった。な、なんだってんだ。

彼女は、釣り上がった目で俺をにらむなり、憎悪をむき出しにして吐き捨てる。

「よくもまあ。わたくしの前に、のこのこと顔を出せたものですわ」

「ええっ……」

絶句する俺に、悪魔のような一瞥を投げると。そのまま、奥の部屋へと入っていく。

取り付く島もなかった。

「ごめんね。佐美ちゃん、ちょっと機嫌悪いみたい」

実乃莉が代わりに詫びる。だがあの怒りかたは、“ちょっと機嫌悪い”どころじゃなかったぞ。

「まあまあ、座つてよ。さっそく紹介するよ。こちらにいる娘は、学年がひとつ下の……」

「ボクは、佐藤くるみッス。よろしくッス！」

やたらと元気のよいあいさつだ。そういう子は、嫌いではなかった。

くるみと名乗った後輩は、短くまとめた髪に、ぶかぶかの黒いシルクハットかぶっていた。小柄でボーイッシュな風情なので、スカートをはいてなかったら、少年だと見紛うところだ。

「よろしくな！」

負けないように、俺も元気よくあいさつを返す。

「ところで。俺はなぜ、ここに呼ばれたんだ」

「あのね……。今から話すことは、すべて本当のことなの。だからね、真面目に聞いて欲しいんだよ」

急に改まる実乃莉。

俺としても、朝から超常現象に巻き込まれたんだ。ある程度、常識では通用しないことが起きているのは、覚悟できている。

「実はね。今わたしたちがいる場所——地球、ひいては宇宙全体の領域。ここはね、【幻滅郷】モノトールランドという、世界の一部に過ぎないんだよ。

そして、深い眠りの領域には、【ファンダーランド幻夢郷】と呼ばれる、もう一つの場所があるんだよ」

「それは、世界がふたつある、ということか？」

「厳密に言うとな。大きな世界のなかに、小さなふたつの世界がある。そう考えてもらいたいんだよ」

「そのふたつが、幻滅郷と、幻夢郷」

「うん」

「で。俺たちの世界と、その幻夢郷って場所に、何の関係があるんだ」

「今から百五十年くらい前にね。こちらの領域から、幻夢郷に渡った男がいたんだよ。彼は幻夢郷に、ひとりの女の子を誕生させた。

『何者でもあるが故に、何者でもなかった』存在に、『アリス』って名前をつけたんだよ」

アリスか。いい名前だな。

「彼はその後、すぐに幻夢郷を離れた。覚醒に生きる人間が、長くいられる場所じゃないからね。残されたアリスは、夢の国でのびのびと暮らしていた。仲間もたくさんできた。だけどね。楽しい時間は永遠には続かなかったんだよ。——幻滅郷の人たちが、彼女を犯したから」

「犯したっていうのは？」

「性的に、陵辱したんだよ」

実乃莉はそういうと、眉をひそめた。痛切な表情で話をつづける。

「アリスは、夢で暮らす女の子だから。人々が淫らな夢をみれば、彼女は犯されてしまうんだよ」

「それは、なんというか。気の毒だな」

「うん。それで、彼女の精神はおかしくなってしまった。でもね。もしかして彼女にいちばん酷いことをしたのは、幻夢郷の仲間かもしれないんだよ。仲間たちはね、暴れて手の付けられなくなったアリスを見捨て、この幻滅郷に亡命してきたんだよ」

そこまで話すと、実乃莉はうつむいた。言うべきことを整理する

ように、こめかみへ指をそえる。

少し悩んでから、顔を上げた。

「太一。わたしはね。その幻夢郷の住人だったんだよ」

実乃莉と目が合った。彼女は視線をそらさず、俺をまっすぐ見つめている。

「わたしだけじゃ、ないんだよ。くるみちゃんや、さっきの佐美ちゃんもそう。彼女たちも幻夢郷の住人」

嘘を言っている瞳ではなかった。そもそも実乃莉は、こんな誰も得しないウソをつくような奴ではない。

俺は戸惑いつつも、話のつづきを促した。

「それで、残されたアリスはどうなったんだ」

「一人きりになった彼女はね。復讐するため、ぬいぐるみたちを産み出したんだよ。名伏しがたい、グロテスクなぬいぐるみ。それは、遠い昔にこの宇宙を支配していた、邪神の復活を意味するんだよ」

「邪神の、復活……」

「そう。遙か太古、幻滅郷の宇宙は、邪神たちが支配していた。彼らは人間とは比べものにならないくらい、圧倒的な力を持っていたんだよ。だけど、星辰の運行によって、深い淵に封印された」

実乃莉は、ふいに窓の外を見た。

空は青く晴れ、ゆるやかに白い雲が流れている。

「あの彼方に、星々をめぐって邪神が蠢いているッス。人の身からすれば、ちよつと想像しがたいッスよね」

くるみが、かぶったままのシルクハットを、くるくると回しながら言った。

確かに青空は、争いとは無縁といった様子で広がっている。ここで話していることなんて、夢物語のようだ。

だが。

俺は空の青さよりも、幼馴染の言葉を信じることにした。

「話は理解したぜ。要は、夢の世界にいるアリス嬢ちゃんが、星を動かし、邪神を復活させ、俺たちのいる世界に復讐をはじめた。だ

から俺が、幻夢郷からきたお前たちと一緒に、邪神どもを倒す——。
そういうことだろ」

「うん。物分りがよくて助かるよ」

実乃莉は満足そうにうなずいた。

「んで、気になることがあるんだが。今聞いた話と、俺の唾液が黒くなったのは、関係あるのか？」

「いい質問ですねえ」

実乃莉は、人差し指を立てながら言った。

「今朝も言ったようにね。太一のなかには、クトウルーっていう、邪神の魂が宿っているんだよ。本来は、邪神と人間がキレイに融合するなんてありえないんだけどね。何者かのすぐれた魔術師によって、太一は、クトウルーと共存できているんだよ」

「邪神が、俺のなかにいるのか」

「それもとびつきの奴がね。クトウルーは水の神性を持つ、強力な邪神だよ」

「ほほう」

「ひとことで言えばね。すんごく大きな、タコの神様なんだよ！」

「……弱そうじゃねえか」

強力なんじゃなかったのか。ショックだ。邪神っていうから、もつとカッコいいのを想像していたのに。

「まあいいさ」

俺は、話題を切り替える。

「とりあえずだ。他の邪神たちが、どこからくるのか知りたい。今朝みたいに、急に襲われたらたまらん」

「今朝のナイトゴントはね、邪神ではないんだよ」

「そうなのか。いかにも邪な感じだったけどな」

「邪には違いないけどね。ナイトゴントは、邪神の下僕みたいなもんだよ。邪神っていうのは、もっとこう……」

実乃莉が言いかけたとき。

ガタンッ。

ものすごい勢いで、くるみが立ち上がった。

震える指で、窓をさしながら叫ぶ。

「ああ、窓に窓に！」

「なに。もう来たのか？」

俺は身構えた。さあ、邪神とやらよ。

「かかって来い！」

だが。

窓から見えたのは、メガネをかけた女生徒だった。ふたつのお下げを、水色のシユシユで留めている、地味な女の子。

「あつ。あんなところにいたんだ」

実乃莉が、メガネ女に近づき、窓を開けながら紹介する。

「この娘はね、潮^{しほ}翔子^{しょうこ}ちゃん。くるみちゃんと、同じ学年なんだよ」

「で、もしかして」

「察しの通り。彼女も、元・幻夢郷の住人だよ」

邪神どころか、味方だった。

俺が拍子抜けしていると、

「ブヒヤヒヤヒヤッ！ ひっかかったツスね、太一さん！」

くるみが抱腹絶倒していた。

ただの、ドッキリだったようだ。

「かかって来い、とか言っちゃって！ 年下の女の子になに言ってるんツスカ。ヒーヒーッ」

「お前。笑いすぎだぞ」

このテンション、なんとかならないのか。女じゃなかったら殴っていたところだ。

翔子と呼ばれた娘も、声は立てないものの、口を最大限に歪ませニヤニヤしている。人の醜態を心から楽しんでいるようだ。

こういう陰湿な笑い方のほうが、笑われる側としては辛い。

「太一、ごめんね。彼女たちは悪い娘じゃないんだよ。ただちよつと、悪ノリするだけで」

「なんとなく、幻夢郷がどんな所なのか、わかった気がするぜ」

俺は深いため息をついた。

実乃莉が、はげますように肩を叩く。

「まあ、これから『コール・オブ・クトゥルー部』として戦う仲間なんだからね。仲良くしようよ」

「ん？　なんだその部は」

「わたしたちの、部活名だよ」

実乃莉は両腕を広げて言った。

「ここはね。クトゥルーに集いし八人の少女たちが、地球を守る。そして、幻夢郷の平和を取り戻す。名付けて『コール・オブ・クトゥルー部』、だよ」

第二章・その一

『コール・オブ・クトウル』部』なる活動に参加し、邪神を倒すことになった俺。なんでも、俺には、邪神の魂が込められているらしい。

ふだんから、俺は自分のことを神に近いなにかではないかと思っていたので、邪神を秘めていると打ち明けられても、さほど驚きはなかった。

今のところは、これといった変化は見あたらなかったが。今朝だっていつもどおり、親父と妹に朝食をつくり、弁当まで用意したのだ。こんな家庭的な邪神は、世界中どこを探しても俺しかないだろう。

もつとも。妹の蓮は、相変わらず、たこわさばかりを食べていた。兄がタコの神さまであることも知らずに、いい気なものだ。

ほぼ今まで通りではあるが、しいて変化があるとすれば、「テケリ・リ」と笑うバケモノが見えること。そしてバケモノが近づいたときに唾液が黒くなることくらいか。それらは別に、日常を脅かすほどの変化ではない。まだ邪神の活動は本格化していないのだろう。他に、気になることと言えば。

銀河の弟である、太陽の様子がおかしいことくらいか。

通学路の途中で会った銀河は、弟の不穏な行動を報告する。昨晚、太陽が声優の握手会から帰ってきたのは深夜すぎ。家族になんの報告もなく、そのまま部屋に鍵をかけ閉じこもったという。

「なんかさ。太陽の部屋から、朝までギシギシ音がしたんだ」
銀河は、肩をおとしながら言った。

「あまり想像したくないんだけど。たぶん太陽の奴、夜が明けるまで、抱きまくらとハッスルしてたんだと思う」

「まあ、あれだ。好きな声優に会って、テンションが上がりすぎたんだな」

「限度があるだろ。あいつ、風邪ひいたみたいで、今日は学校休んでるんだ」

「暴走してるな」

「まいったよ。バカは風邪をひかないって、いうのに」

「バカだから、体調管理ができなくて、風邪をひくんだろっ」

銀河は何も答えず、がつくりとうなだれてしまう。

弟の将来を憂いているのだろう。銀河は、ぼそりと呟いた。

「抱きまくらと交接して風邪をひく弟と、この先どう付きあえばいいかわからない」

銀河もなかなか大変そうだが。

俺は俺で、別の問題をかかえていた。

昼休み。四人の女生徒が集う会議室へ、足を運んだ俺に、

「あなたの顔なんて見たくない。わたくし、そう申したはずですわ」
練環佐美は、顔を見るなり毒を吐いてくる。読んでいた文庫本から目上げた彼女は、縦ロールを指でこねくり回しながら俺をにらみつけてた。鋭い目付きと、頭のうえにのせたティアラが、キラんと光る。

なぜ俺を敵視するんだ。なにひとつ思い当たるふしがない。俺は、女にだけは恨まれない生き方をしてきたつもりなのに。

「ねーねー。佐美ちゃんは、なに読んでるの？」

気まずい空気をきりかえるように、実乃莉が話をふった。

「研究しているのよ。魔導書についてね」

「魔導書がないと、わたしたち、幻滅郷で邪技を使えないもんね」

「そうよ。わたくしの研究成果あってなんだから」

「ホント、佐美ちゃんには感謝してるよお」

実乃莉が拝むポーズをすると、佐美は満足そうに鼻息を荒めた。
おだてられるのに弱いらしい。

うきうきした表情で、読んでいた本へ栞をはさむ佐美。タイトル

には、見たことのない文字が記されている。外国の書物なのだろう。本を閉じた佐美は、いつになくなめらかな舌で、実乃莉に話しはじめる。

「幻滅郷に来てから研究を怠らなかつたおかげで、いろんなことがわかってきたわ。たとえば、あなたが所持している“ナコト写本”だけれど。あれはね、人類が誕生するよりも前に書かれたものなのよ。ナコト写本には、最も古い神話が、図をまじえて説明されているらしいわ。さしずめ『図解・原初の神話』ってところね。一説によれば、ナコト写本は古代の北極圏から伝えられているそうだけれど……。人類誕生前に書かれていたなんて、いったいどんな生命体が記した書物なのか、非常に興味があるわね」

佐美はひとりで、うんうんと頷いていた。周りとの温度差に気づいていないらしい。一気にまくしたてると、今度はくるみに向きなおる。

「それで、あなたの魔導書はね……」

「あ、ボクは興味ないツスよ」

さらりと言われてしまった。

佐美はがっかりした様子で、「そう」とつぶやいたきり、黙ってしまう。つまらなそうに、ふたたび文庫本を読みはじめた。感情の起伏がはげしいやつだ。おそらく、自分の好奇心だけを基準にして生きているのだろう。

実乃莉はというと、くるみを見ながらほつぺたを膨らませていた。対するくるみは、シルクハットのつばをいじりながら悪びれた様子もなく口笛を吹く。

実乃莉が耳打ちする。佐美には聞かれないように、小声で話しよう声もれる。

「ダメだよ、くるみちゃん。せっかく佐美ちゃんが機嫌よくなつたのに」

「だって、興味ないツスもん」

「社交辞令を身につけないと、この世界では生きていけないんだよ。」

ずつとお茶会やっているわけには、いかないんだから」

実乃莉が説教をしている。だが、幻夢郷あがりの人間に、社交辞令を教え込むのは難しいだろう。

ふたたび室内が気まづくなる。今度は俺から話をふった。

「お前たちさ。幻夢郷にいたんだろう。その時の記憶って、残っているのか」

「残ってるんだよ」

実乃莉が、両手で胸をおさえながら答える。

「わたしは幻夢郷で、『バンダースナッチ』と呼ばれていたんだよ」「どんな奴なんだ」

「それはね……言えないんだよ」

イタズラっぽく笑った。口元にえくぼができる。

俺は不覚にも、ドキッとしてしまった。秘密の作り方が上手いやつだ。

「太一さん。ボクはね、『マッドハッター』をやったツスよ！」

「ふうん。マッドってあたりが、くるみっぽいな」

でかいシルクハットの下で、ナチュラルハイに笑ってくるみへ、素直な感想を述べる。じゃっかん皮肉のつもりだったのだが、彼女は気づいていないようだ。むしろ褒められた子どものように喜んでいる。

俺は次に、メガネの娘に訊く。

「君は確か、翔子って言ったよな。あっちでは何やってたんだ」

「拙者は『チェシヤ猫』だったでござる」

「ほ、ほう。チェシヤ猫をねえ」

俺は曖昧にうなずいた。いったいどんな猫なのかは見当つかないが、それよりも、彼女の口調が気になった。拙者？ ござる？ 家訓かなにかによるものだろうか。

「んで。佐美は、なにをやっていたんだ」

「ちよつと。軽々しく、呼ばないでほしいですわ」

「いいじゃねえか、呼び捨てでもよ。同じ年なんだし」

「呼び捨てかどうかは関係ないですわ。あなたに、名前を呼ばれることが耐えられませんの」

ぐう。なんでこいつは、俺をそんなに罵るんだ。常に人を見下したような言い方しやがって。

「佐美ちゃんね、『ハンプティ・ダンプティ』をやっていたんだよ。幻夢郷でもね、すぐ博識だったんだよ」

「やっぱ、向こうでも本ばっか読んでたのか」

「そうだね。読書家だったよ」

「その、博識の佐美さんに訊きたいんだけどよ。この前、実乃莉が持っていたナコト写本とかいうやつ、ぜんぶ真っ白だったぜ」

佐美は、文庫本から顔を上げない。徹底的にシカトする気だ。

「なあ、魔導書と呼ぶには、ちよつとパチもんくさくねーか」

「太一。それには、血塗られた歴史があるんだよ」

実乃莉が代わりに答えた。

「血塗られた、歴史？」

「うん。中世のころになるんだけどね。魔導書を使い、邪神たちの力を蘇らせようとした教団があったんだよ。だけど、教会が彼らをまとめて弾圧した。大がかりな異教徒狩りによって、たくさん信者が血祭りに上げられたんだよ。そのときにね、すべての魔導書は焚書されちゃった」

「ってことは。いま手元にあるのは、偽物なのか」

俺の発言に、ついに佐美が反応する。

「失礼ね。偽物だなんて」

文庫本の端からにらんだ。どうも俺はさつきから、彼女の機嫌を損ねる言動ばかりをしているようだ。

俺を見つめる佐美の表情は、憎しみと蔑みに満ちている。

「レプリカと言ってちょうだい」

「似たようなもんじゃねえの」

「いいこと。魔導書のレプリカはね、本物に劣らない魔力をもっているんですわ。そして、この世界に現存するレプリカは、すべてわ

たくしの手によって再現されたんですわよ」

崇めなさい、とばかりに彼女は胸をはった。

「なるほど。よく、わかったよ」

「わかればよろしいですわ」

「お前の胸は、えらく小さいってことが」

「なっ」

佐美は両腕を胸の前にクロスさせる。彼女の顔が赤くなっているのは、羞恥のためか、憤怒のためか。

おそらく、両方だろう。

「信じられせんわ！ わたくし、退席させていただきます」

机をバンツと叩いて、昨日と同じように奥の部屋に行ってしまった。

「……ちよつとした、ジョークのつもりだったんだけどよ」

「いまのは、太一が悪いよ。完璧にセクハラだよ」

残った三人の女性陣は、冷やかな目で俺を見ていた。

第二章・その二

その日の夜。

俺は夕食を準備していた。今晚のメニューはカレーだ。俺のもつとも得意とするメニューである。なんてったって、作るのが楽だからな。

だが俺は、手抜きをするのは嫌いだ。なにをするにも一手間くわえたい。だからちゃんと玉ねぎをみじん切りにして、しっかりと炒めている。

フライパンの上で、徐々にきつね色となっていく玉ねぎを見るのは、けっこう気持ちのよいものだ。立ち上る匂いや、具材が焼ける音も心地いい。

料理というのは、食べるときの味覚だけでなく、五感で楽しむものなんだ。

「おい、太一！」

そんな俺の楽しみを、親父の怒鳴り声がぶち壊した。

「なんと言ったらわかるんだよ。メシの炊き方になってないぞ！」

「うるせーよ」

「父さんは、柔らかめの米が好きだと言っているだろう！」

「十分だろうがよ。これいじょう柔らかくしたら、お粥になっちゃうよ」

自分じゃ作らないくせに、いろいろと注文の多いやつだ。

だいたい、俺は硬めのご飯が好きなんだ。それを妥協して、親父に合わせた炊き方をしているのに。その上、文句をつけるなんてたまったもんじゃない。

「不満なら、親父が料理すりゃいいだろう」

「それができたら苦労しないじゃない。父さんの料理ベタ、太一も知っているでしょう」

たしかに親父の料理は、殺人級に不味い。俺はいつも疑問に思う。

「あんなに手先が器用なのに。なんで、料理がヘタなんだ」

「いやあ。父さんが作るのは、美しいものの限定だから」

「どういう意味だ？」

「旨いものは、父さんの手の対象外なんだよなあ」

「説明になってねーよ」

「いやあ。悪い悪い」

親父は頭をかいた。たいして悪びれた様子もなく、へらへらしている。

俺としては、親父に料理を覚えてもらいたい。そうすれば家事の負担がかなり減る。なんとか丸めこめないもんだろうか。

炒め終えた玉ねぎを煮込みながら、俺は説得をはじめめる。

「なあ親父。スペインの画家でよ、サルヴァドール・ダリっていただろう」

「あの、シュルレアリストの」

「そうそう。んで、ダリの言葉にこんながあるんだよ。【美とは可食的なものであろう】ってな」

「父さん。それ聞いたことあるな」

おお。食いついた。これは押しきれるかもしれない。

「さっきの親父の発言を、くつがえす言葉だろう。やっぱ芸術家ってのは、食えるもん作れなきゃダメなんだって」

「そこ！ 太一の言いたいことはね、父さんもよくわかる。ダリの言葉を知ったとき、ああ父さん料理がんばらなきゃなって思ったのよ」

「がんばってねーじゃん」

「だってさ、太一。考えてみてよ。ダリの絵に書いてある、あんなグチャグチャしたものがさ、実際にあつたらとてもじゃないけど食べられないでしょ。お腹こわしちゃうよ」

「……でもよ。時計が溶けてる絵、あるじゃん。あれなんかは旨そ

うだぜ」

「じゃあ太一は、溶けた時計が食べたいの。うん？　なら父さん、明日から溶けた時計の料理だしてもいいよ。うん？」

顎をしゃくりあげ、親父は俺をのぞいてくる。すぐくム力つく顔だった。俺は鍋の取っ手をにぎりしめる。

だが悔しいことに、俺には言い返す言葉がない。親父のしゃくり上げた顎を見ながら思う。まったく、食うことと屁理屈だけは、長けた口だぜ。

そこで、玄関からガチャツという音が聞こえた。蓮が帰ってきたのだろう。

「ただいまあゝ」

やけに疲れた声で、蓮は言った。ふらつきながら居間へ入ると、制服のままソファにダイブする。ラクロスの道具がその場に散らかった。

「蓮。道具は大切にしろよ」

「だって疲れちゃったんだもんゝ」

ソファに顔をうずめた。

「大会が近くて。練習がハードなんだよお」

「疲れたのはわかったから。早く起きろ。メシにするぞ」

ちようど煮詰まったカレーをよそいながら、俺は食卓へと並べていく。

「あ。レンは、たこわさだけでいいよ」

「だからそう言うなって。せつかく作ったんだから、食ってくれよ」

「でも、疲れすぎて食欲ないもんゝ」

「ちゃんとメシ食わねえと、力でないぞ。大会近いんだろう」

「ういゝ」

気怠い声を出して、蓮はカレーを運んでいく。

すると、テレビにかじりついていた親父が言った。

「いやあ、怖いね。誘拐だってよお」

「ん。誰が？」

「声優さんなんだけどさ、昨日の握手会から行方がわからないんだって」

ほらほらと、親父がテレビを指さしている。テレビではキャスタ―が事件を報道していた。

『昨夜未明から、声優のNさんが行方不明になっています。Nさんの行方がわからなくなったのは、ファン限定による、イベントの直後ということですよ。警察では、熱狂的なファンによる誘拐とみて捜査を……』

「怖いよねえ。これ絶対、ファンの仕業だよ」

「そうかな。仕事が嫌で逃げただけかもしれないぜ」

「いや、父さんにはわかるんだ。だってこの声優さんの声、独り占めしたくなるくらい可愛いもの」

そして親父は、声優Nが担当しているアニメのキャラを列挙した。

「“∞の使い魔”のルイーザでしょ。“けちやチキ!”の遠衛スバルでしょ。“かのわん”の平ちずるでしょ。“だぶりゅうだぶりゅうっ!”の石不動美緒でしょ……」

「その年で、そんなに知っているお前も怖いよ」

「あとね。最近はじめた魔法少女の……」

「もういいって」

親父にツツコミつつ、俺は夕食の準備を終える。リビングに濃厚なカレーの匂いがひろがった。

三人が各々の席につき、手をあわせた。

「いただきます」

そして、いざ食べようとした瞬間。

ピリリリリッ。

俺のケータイが鳴った。ディスプレイには『新世界銀河』とある。

いまからメシだったのに、タイミングの悪い奴だな。

「おう、どうした」

「ヤバイことになってるんだ！」

通話口から聞こえてきたのは、せっぱつまった銀河の声だった。

「なにがあったんだ」

「はやく！ はやく来てくれ」

「来てくれたって、どこにいるんだよ」

「ダニッチ公園！ たのむよ、もう俺一人じゃ……ああ！ もうダメ……」

「おい、銀河！ もしもし。もしもしっ！」

電話は、そこで切れていた。

「くそっ。何が起きてるってんだ」

奴の様子は尋常ではなかった。緊急事態であることは間違いない。

「ちよつと行ってくる」

俺は上着をとると、玄関へ向かう。

親父が心配そうに訊いた。

「なにかあったのかい？」

「よくわかんねえけどよ。とにかく、ヤバイことになってるらしい」

銀河はダニッチ公園にいるといていた。その公園は、墓地にかこまれた寂れた場所で、人通りは極めて少ない。もしかしたら、大きな事件に巻き込まれている可能性もある。急いだほうがいいだろう。

すぐに、家を出た。

公園に向かって走る。

「銀河。無事でいてくれよ」

つぶやきが、夜景とともに俺の背後へと流れていった。

第二章・その三

十分ほど走り続けて。

ようやく、ダニツチ公園にたどり着いた。

公園には銀河の姿はなかった。代わりに俺を待っていたのは、奴の弟である太陽だった。

彼はあろうことか、外灯の薄明かりのしたで、抱きまくらにキスをしていた。

「……ヤバイって、このことかよ」

たしかに、ヤバイことはヤバイ。今の太陽は、とても人に見せられるものではなかった。しかし、だからといって、あんな深刻な電話を超越することもないだろう。

「ったく。焦って損したぜ」

俺が息切れた呼吸をととのえていると。

「太一さん。おつかれッス」

背後から、聞き覚えのある声した。振り向いた先には、巨大なシルクハットがあった。

くるみだ。

「どうしたんだ。こんなところに」

「ボク、この近くに住んでるんッスよ。太一さんがものすごい形相で走っているのが見えたから、追いかけてきたッス」

「じゃあ、来るだけ無駄だぜ」

俺は太陽を指さして言った。

「ここにいるのは、あそこで抱きまくらにキスしてる男だけだ」

「ありやまッス。邪神が現れたのかと思って、翔子を呼んじやったッスよ」

太陽を一瞥してから、くるみがストラップだらけの携帯を取り出した。翔子への通信履歴が残っている。

その直後、草むらの中から人影が走ってきた。

「ついに邪神が現れたでござるか？」

息を弾ませた翔子だった。

「残念だったな。はずれたよ」

俺は翔子にも説明する。彼女はビックリした様子で太陽のほうを見ていた。まあ、急に呼びつけられてあんなものを見せられたら、誰だってそんな顔になるわな。

「ここに邪神なんていやしない。いるのは俺たちと、あそこのカッブルだけだ」

「太一殿。なにを言っているでござるか」

翔子は、分厚いメガネを押し上げながら言う。

「あれこそ、邪神が憑依した姿でござるよ」

彼女の視線の先には、魔法少女らしきキャラが描かれた枕を抱く、太陽しかない。

「そりやお前。いくらなんでも失礼だろう」

「失礼もなにもないでござるよ」

「抱きまくらにキスしたくらいで、邪神だなんてよ。趣味がちよつと行き過ぎただけだって」

「違うでござる。邪神が取り付いているのは、太陽くんのほうじゃなくて……」翔子は俺に向き直った。「あの、抱きまくらのほうでござる」

「な、なにに！」

「よく見るでござる。太陽くんの周りを、独特の闇が覆っているでござろう。あれが、少女悪夢。アリス・マリス幻滅郷と幻夢郷が、重なった空間。

邪神がこの世界に侵食してきた証拠でござる」

言われてみれば、はじめてナイトゴーストと戦ったときのような暗闇が、抱きまくらを中心に広がっていた。もともと外灯しかないうす暗い公園だから、気が付かなかった。

「太陽くん……。彼とは、同じ中学だったでござる。趣味があつてよく話したでござるが。しばらく見ないうちに、一線を越えてしまったようでござるな」

翔子はニヤニヤしながら太陽を見た。笑っている場合じゃないと思うのだが。

「とにかくだ。翔子、あそこにいるのはどんなヤツなのか、教えてくれ」

「魔法少女のプリンでござる。悪魔を召喚して戦うという設定あたり、我々の境遇と似ているでござるな。ちなみにプリンは「お兄ちゃん」とささやく声がかわいいと評判になり、ナンバーワン妹キャラの称号をもっているでござるよ。でも実態は、魔法少女と謳っておきながら相手をナタで惨殺する武闘派でござる」

「いやいや。抱きまくらじゃねーよ。邪神のほう」

「これは失礼」

翔子はまた、メガネを押し上げた。そうとうレンズが重いようだ。「拙者、オタクでござるからな」

「だからお前、そんなしゃべり方なのか」

「そうでござる。何をやるにせよ、成り切る覚悟が必要でござるからな」

ニヤニヤと笑う。成り切る覚悟もなにも、今時、ござる口調はないだろう。

「つて。そんなことはどうでもいいんだって。抱きまくらに憑依した邪神は、何者なんだ」

「“ツアトウグア”でござる」

「詳しく教えてくれ」

「この世界には、物質を成り立たせる要素として“四大元素”と呼ばれるものがあるでござる。『水・風・火・土』」

「そついや、実乃莉が言っていたな。クトウルーは水の神性を持つつて」

「そのとおりでござる。邪神のなかには、四大元素の神性を司るものがあるでござるよ。そしてツアトウグアは、“土”に該当する邪神でござる」

翔子の説明が終わるころ。

魔法少女・プリンは、ヒキガエルのような巨体に変わっていた。耳が裂け、気だるそうな赤い瞳をこちらへ向けている。

だが、完全な憑依は終わっていないらしい。体の一部からは泥のような液体を垂れ流している。プリン体をコントロールしきれず、ちくはぐな動きをくり返す。

奴を覆っている暗闇が、激しくぶれていた。少女悪夢が安定していないようだ。

「ふたつの世界が融合しきる前に。ボクたちも、戦闘態勢をとるッス」

「では。まずは、拙者からお願いするでござる」

翔子が俺の前に立った。

そうだった。彼女たちを変身させるためには、キスをしなくてはならないんだ。

翔子には心の準備はできているようで、顔を上に向けている。

アヒルのようにすばめられた厚い唇。すうっと通った鼻筋。レンズでよく見えないが、細められた瞳は凛々しい。

近くで見ると、彼女は美しい顔立ちをしていることがわかった。

お約束通り、メガネをとったら美少女なのだろう。

「失礼するぞ」

はじめて気づいた翔子の可愛さに軽くためらいながらも、俺は唇を接触させた。だが浅いキスでは足りない。彼女を変身させるには、ここから唾液を送り込む必要がある。俺は舌を出し、翔子の口内に侵入させた。

ふたつの舌が絡みあう。

「ん……」

翔子の悶えるような呼吸。俺の唾液が、彼女の喉を下りていく。じわじわと、翔子の体が黒く染まった。

「次は、ボクの番ッスね」

勢い良く、くるみが俺に抱きついてきた。背が小さいため、唇の位置を合わせようとすると、どうしても彼女の爪先が浮いてしまう。

俺は支えるようにして、くるみの背中に手を回した。

おちゃらけた雰囲気と、大きなシルクハットのせいで目立たなかったが。くるみもやはり、近くで見ると美少女の類であった。少し中心に寄った顔のパーツが幼さを残してはいたが、シルクハットのつばで翳った大きな瞳は、アルカイックな雰囲気秘めている。ふたつの時間が同時に流れているような彼女の顔立ちは、倒錯的な色香があった。

にもかかわらず、加減も知らずに突きだした唇は、やはりあどけない。餌をせがむ小鳥のようにいじらしい唇へ、俺はキスをした。
「はう……」

くるみは蕩けるような瞳で、送りこまれた唾液を嚥下する。地面に着地させても、宙に浮いているようにポーツとしていた。彼女の皮膚が黒く染まっていくなか。頬だけは、最後まで朱色だった。

「なんか、ぼわくっとするッス」

キスを終えた彼女たちが言う。

「はあ。太一殿との接吻は、いいものでござるな」

フツ。これがキス神と呼ばれた俺の、真の実力よ。

しかし、今はそんなところに力を発揮している場合ではない。戦うべきは太陽に取り付いた邪神・ツアトゥグアではないか。

俺は、まだ呆けている彼女たちに言う。

「早く変身しろよ」

「……頭が、溶けそうでござるなあ」

「俺のキスでいいなら、後でいくらでもやってやるから！」

その言葉で、彼女たちは我に返る。

「ほ、本当でござるな」

ポケットからそれぞれの魔導書を取り出した。

白紙のページ一枚、破って宙へと放る。

「無名祭祀書よ。クトウルの呼び声に応じよ。胸に輝くトラペゾヘドロに誓って、我に力を与えるでござる」

「屍食教典儀よ。クトウルの呼び声に応じよ。胸に輝くトラペゾ

ヘドロンに誓って、我に力を与えるツス」

詠唱と同時に、彼女たちの衣服は消える。瞬く間に巨大化する白紙のページ。ふたりの黒い体を包んだ。

俺の唾液が、魔導書のページへ染みこんでいく。
くるみ。翔子。

ふたりの女拓が完成する。

彼女たちは白と黒の光に包まれて見えなくなる。ふたたび視界が晴れたとき、そこに立っていたのは。

髪の毛が触手になった、翔子とくるみだ。
変身完了。

戦闘の準備は整った。

第二章・その四

「あんたたちさあ。とつぜん出てきて、なんなわけ？」

太陽が俺たちをみて言う。奴はすっかり正気を失っていた。狂気に満ちた目で、涎をまき散らしながら叫んだ。

「僕とプリンの時間を、奪わないでほしいんだよね！」

「太陽。お前、いいかげん……」

俺が説得しかけたところで、

「ツアトウグアのやつ、能力を発動したツス！」

くるみが叫ぶ。見ると、ツアトウグアの周りにはボコボコと土の柱が現れる。ただの土の塊は徐々に形を変え、人に近い姿となっていく。胎児からの発育を見せられているような生々しい映像を前にして、さすがの俺たちにも緊張感が走る。

「フハハハハ！ 我が邪技、食らうがいい」

もはや原型をとどめず異形となった魔法少女・プリンが吼えた。

「土人形遊戯【ゴーレムダンス】！」

ヤツの声に反応して、土人形が最後の発育を終える。完成した土人形は、ツアトウグアが憑依する前の、プリンの容姿になっていた。金髪ツインテールのフワロリファッション娘が、約二十体。俺たちへにじり寄りながら、いつせいに「お兄ちゃん、だーい好き」と嬌声を上げている。

異様な光景だ。

「敵さんも趣味が悪いぜ」

「そうでござるか。拙者は、テンションがあがるでござるが」

翔子はオタク心がうずくのだろう。今までにないほどニヤニヤしている。

「まったく。悪夢ってのは、悪趣味な夢ってことみてえだな」

「——太一さん。くるツスよ！」

土人形どもがいつせいに襲ってくる。「お兄ちゃん」「お兄ちゃ

ん」「お兄ちゃん」「お兄ちゃん」「お兄ちゃん」「お兄ちゃん」……。

甘ったるい声を出しながら、飛びかかる。

俺は迫りくるプリンたちを丸腰で迎撃する。女を殴るにはいささか抵抗があつたが、相手はアニメキャラを模した土人形だ。このさい構うまい。

人形どもの動きはにぶく、また脆い。たった一撃くらわせただけで崩れる。

「どうやら、俺の敵ではないみたいだな」

すべて撃退し終えた俺は、公園に点在する土の塊を見渡して言った。

だが。

「その程度で、仕留めた気になるな。クトウルと人の雑種よ」

プリンに寄生したツアトウグアが言うと、崩れたはずの土がまたしても蠢きだした。土片はぬるぬるとナメクジのように這いまわり、またしても魔法少女の形となる。

しかも今度は、全員がナタを持っている。

右手に握られた鈍い刃物をみて、俺は思う。さすがに丸腰で敵う相手ではなさそうだ。

武器を手にしたものの、プリンたちは完全に固まっておらず、動きがのろかった。倒すなら今しかない。

「ちよつと待ったッス！」

くるみが、俺の前に出て身構えた。

「ここは、ボクの力を見せるときッスよ」

「大丈夫なのか。相手はナタ持ちだぞ」

「平気ッス。太一さんはそこで見ててくださいッス」

くるみは俺を制して、仁王立ちになる。振り返ったまま上着の裾をまくり上げた。

「邪技・臍で茶を沸かす【マッド・ティーパーティー】！」

へそ出しルックになり、技名を叫ぶと、

「ギャハハハハッ！ オエツオエツ！ ヒーヒーッ！」
大笑いをはじめた。

夜の公園に、くるみの笑い声が轟いていく。

「ヒーヒーッ！ ボ、ボクの技は、大笑いすることで……ギャハハハッ！ へ、へその周りにある空気中の水分を、ふ、フハッ！ フハッ！」

「なるほど、解った」

俺は、くるみの解説を引き継いだ。

「お前の能力は、笑うことで熱湯を作り出すんだな」
「そ、そうツス！」

笑いすぎで目に涙を貯めている。見た目はマヌケだったが、くるみの周りからはじわじわと蒸気が立ち上ってくる。お湯が湧きはじめたようだ。溜まった涙も蒸発し、目元で塩になった。

「さあ、食らいやがれツス」

臍で沸かしたお湯を土人形に放つ。熱湯が弧を描いて、プリンを模った人形の手足にかかる。

しかし、効果が浅い。くるみの熱湯は、土人形の一部を溶かすだけで、いまひとつダメージを与えていなかった。

「アーハッハッハ！」

新しく響きわたった笑い声は、太陽のものだった。俺たちの戦いぶりを見て大笑している。

「僕のプリンには、効いてないようだねえ」

「太陽！ お前いいかげん、目を覚ませよ」

「やだなあ。なにを言ってるんだか。僕とプリンはこんなに愛し合っているんだ。だからプリンはこうして、三次元まで会いに来てくれたんじゃないか」

ヒキガエルのように浮腫んだプリンを抱き寄せる。

「それは違うぞ、太一。愛とかそういうんじゃないんだ」

「嫉妬ですか。見苦しい」

太陽はクッククックと笑う。ちくしょう。話が噛み合わないな。ど

この世界に、抱きまくらへ恋する男に嫉妬するやつがいるんだよ。
とはいえ、今は事情を説明している暇はない。どのみち太陽を説
得したところで状況はかわらないのだ。

俺は土人形の群れに向き直る。ナタを持ったプリンが、完成しよ
うとしていた。

「なめてもらっちゃ困るツス。ボクの本当の力は、これからツスよ」
くるみがシルクハットの中から、ヤカンとティーカップを取り出
した。何を思ったのか。先ほどのお湯で、お茶を淹れはじめた。

「おい。茶なんて飲んでる場合かよ」

「心配いらないツスよ、太一さん。これこそボクの真の力ツス」

「真の力……」

「幻夢郷での狂ったお茶会を、再現するツス！」

くるみは旨そうに淹れたての茶を飲んだ。がぶ飲みだ。

その途端。

彼女の全身が、またたく間に躍動していく。すべての肉が筋肉に
変わったように、硬く盛り上がっていた。つるぺただった体型は激
変し、完全にアスリートの体格となった。

自慢気に、上腕二頭筋へコブを作ったくるみ。まさに小さな巨人
だった。

「幻夢郷じこみのお茶には、ボクをパワーアップさせる効果がある
ツス」

ギヤハハハハッ！　くるみはまたしても大笑いした。だが今回
は、いつもの理由のないバカ笑いとは違っていた。

圧倒的な力の差を確信した、不敵な笑みであった。

「さあ。——狂ったお茶会へ、ようこそツス」

くるみが暴れる。本人が言ったとおり、身体能力はいちじるしく
向上しているようだ。

バググンの破壊力で、土人形を粉碎する。

くるみの笑い声は止まらない。ギヤハハハハッ！　人形をすべ
て破壊したというのに、まだ笑っている。

「そのチビ筋肉娘。やるじゃないか。だがな、そいつらは何度だってよみがえるぜ」

太陽が右腕をかがげ、パチンと指を鳴らした。
またしても泥がナメクジのように蠢きだす。

これじゃ、きりがないぞ。

「ちよつと待つでござる」

今度は翔子が俺の前に出た。

「拙者のこと、忘れてもらっちゃ困るでござるよ」

太陽のほうへゆっくりと近づいていく。翔子はほくそ笑みながら言った。

「――邪技・神出鬼没の艶笑【キャットウォーク】」

「なっ、なんだよそれ」

「お主の体に、ちよつとした細工をさせてもらったでござる」

口を最大までひろげて、ニヤニヤと笑った。

「太陽殿。お主の体は、“DHMO”に侵されているでござる」

「D……？ だからなんだよ！」

「正式名称、ジハイドロジェン・モノオキサイドDihydrogen Monoxide……。略してDHMO。この物質の特徴をざつと挙げると。これは、水酸の一種で酸性雨の主成分でござる。腐食を進行させ錆びつかせるでござる。残酷な動物実験に使われているでござる。悪性の腫瘍からも検出されるでござる。地形を侵食し地図を描きかえる力を持つでござる。そして、この物質を摂取したものは――。必ず、死ぬでござる」

翔子のメガネが鈍く光った。ニヤニヤと、陰湿な笑いをつづけている。

少女悪夢が生んだ薄闇のなかで、太陽の顔がこわばった。

「そ、そんな危ないもの、僕に流し込んだのか！」

「そうでござる。もっとも、DHMOの一般的な名称というのは。

……ただの“水”でござるが」

静かに肩をふるわせて忍び笑う。

「ジョーク。でござるよ」

「な、なんだよ……」

「しかしまあ、太陽殿。水というのは、実に多様なものでござるな。人体にとつては都合良くも、悪くもなるでござる。拙者の邪技・キヤットウォークは、その水のあり方を、限定的に変えられるでござるよ。たとえば、こんなふうには」

翔子は胸の前からぐるりと両腕をひるげる。その先には、再生を試みる崩れた土人形たちがいた。だが、いつまでたっても固まらない。

柔らかい土はちぐはぐに絡まっていた。肘のあたりに胸があったり、頭の前から足がはえたりと、とても人体とは思えない形状になっている。

「土人形に含まれる水分を、油に変えさせてもらったでござる。油は水に比べて乾燥しにくいでござるからな。なかなか固まらないでござるよ」

にやつく翔子。

公園を走りまわりながら笑ってくるみ。

ふてぶてしく笑う彼女たちを見て、俺は思った。

強い。

幻夢郷の力、恐るべしだ。

第二章・その五

「ど〜〜〜んなもんだいッスよおおお」

勝利の余韻にひたっているんだろう。くるみが焦点の合わない目を泳がせながら言う。まだ紅茶の効果が切れていないようで、筋肉隆々のテンションMAX状態だ。

「よくやったぞ、くるみ」

俺は素直に感心していた。しかし彼女は聞く耳をもたず、

「まだまだやれるッスよおおおお！」

と、暴れている。

「いや、もういいんだ。お前の出番は終わった」

「ボクのかちゅやくは、これからッスよおおおお」

ろれつの回らない口調で、わめき散らすくるみ。血管の浮き出た腕をふり回している。

「くるみ殿。拙者たちの役目は終わったでござる。あとは太一殿にまか……」

「おみゃーは、ひつこんでろッスううう！」

なだめるために近づいた翔子を、全力でふっ飛ばした。翔子はゴロゴロと十メートルほど転がり、うつぶせの状態で止まる。ピクリとも動かない。どうやら、気を失っているようだ。

殴ったくるみも、ほとんど意識を失っているようだ。千鳥足のまま公園内をふらついている。いったい、あの紅茶には何が入っていたんだろう。くるみは前後不覚のまま遊具に激突すると、翔子に覆いかぶさるようにして倒れた。

ふたりとも動かなくなった。

「なにやってんだよ」

めずらしく褒めてみたら、この有様だ。

まあいい。お前たちはよくやった。

ここからは、俺の仕事だからな。

イボだらけに肥大化したプリンと向き合う。少女悪夢のせいですらに暗くなつた闇のなか、あいつに憑依した邪神を追い払うため、俺は今からキスをする。

「俺がその悪夢、目覚^さませてやる」

唾液を流し込み、ツアトウグアの力を相殺させれば、ゲームセツトだ。

しかしここで伏兵が入る。

太陽が、俺とツアトウグアの間に入った。

「僕たちの愛を邪魔するやつは、許さないからな！」

「いやさ。愛っていうけどよ。そもそもあれは、抱きまくらなんだぞ」

「そんなこと関係ない！」

太陽はその場に崩れ落ちる。地面に何度も何度も、頭を叩きつけながら叫んだ。

「僕はプリンが好きで好きでしょうがないんだ大好きなんだ世界でいちばん愛しているんだ！何の取り柄もなくていじめられて家族にも疎まれている僕にはもうプリンしか信じられるものがないんだよ僕にはプリンを愛する以外になにもないんだ。だからいつもプリンのことを考えているしいつもプリンだけを見ているんだ。そしたらとつぜん僕の抱きまくらが動き出したんだ。本当にあつたんだよこんなエロゲみたいな展開。ついに僕の愛が二次元に通じたんだ！」

額から血を飛び散らせながら、太陽は頭を叩きつける。

本当は彼も、うすうす気づいているのだろ。愛で抱きまくらが動き出すわけではない。自分の頭がおかしくなったのかもという、理性が働いているようだ。

「通じたんだ……通じたんだ……」

それでも太陽は、自分の愛が通じたと信じこむため、必死に頭を叩きつけている。

「あのな。太陽。じつは……」

「うるさあい！誰がなんと言おうとやっぱ僕だけがプリンにと

って本当のお兄ちゃんだ！プリンはずっと僕にだけ向けて「お兄ちゃん」と呼んでいてくれたんだ！」

「どうして、こんなになるまで放っておいたんだ」

あまりにも一方的で、独占的すぎる太陽の告白。

俺は言葉を失ってしまふ。

太陽は涎を撒き散らしながら、それでもプリンへの愛を説きつづけている。

もう太陽には、周りが見えていないのだろう。うつぶせになりながら、大地に向かって叫ぶ。

「だけどある時プリンにキスする僕へ兄さんが言った。「おい太陽、これはただの絵だぞ」。だけど、それがどうしたっていうんだ。僕にとつて重要なのはプリンが絵だとかデータとかそういう問題じゃないんだよ。僕はただプリンがそばにいてることを感じられればいいんだ。プリンが僕のなかに生きていてると感じられたらそれだけで幸せなんだよ。じゃあ逆に言わせてもらうけどね。僕たち人間だって生命を創りだした神によってプログラムされたCGみたいなもんじゃないの！」

「——たしかに。俺たちはCGかもしれねえな」

俺の言葉に、ようやく太陽が反応する。

血と涎と泥にまみれた顔を上げた。

「いま、なんて……」

「俺たちは、神にプログラムされているCG。それは認めるよ」

「なら、僕は……」

「だけだよ。その神が正しいなんて保証は、どこにもないんだぜ」

俺は太陽の顔を、袖でぬぐってやる。

「人間ってやつは、運命を自分で書きかえられんだ。お前は下手くそな神のシナリオに振り回されただけだ。そんなもの、全部リライトしてやるうぜ」

「リライト……？」

「ああ。お前ならできるさ」

俺は太陽の肩を抱いた。頼るものもなく、妄想にすがり続けた男の肩は、小さく震えていた。

なんて、盛り上がるシーンなんだ。

運命はリライトできる。自分で言っ、ちよつと感動してしまつたぞ。

だが。

俺らをみていたツアトウグアが、退屈そうに言っ。

「茶番はそのくらいにして欲しいんだよねえ」

「なんだよお前。まだいたのかよ」

「ちよつと失礼じゃん。それになに、下手なシナリオって。誰のことなの。ねえ」

「自覚あるなら黙つたらどうだ、ヒキガエル野郎」

俺はツアトウグアに殴りかかった。

動きがのろい。ヤツは微動だにすることなく俺の拳を受ける。

クリティカルヒットだ。

鳩尾にめり込んだパンチで、ツアトウグアはその場に崩れ落ちる。殴った瞬間、何かが破裂する感触があつた。ツアトウグアの古くなつたゴムみたいな腹ではなく、生々しい手応えだつた。最近の抱きまくらは、こんなにリアルに作られているのか。

轢かれたカエルみたいな体勢で、動かなくなつたツアトウグア。

ヤツの体を抱き上げながら、俺は太陽を振り返る。

「さあ。いまから、お前の新章がはじまるぜ」

第二章・その六

俺はツアトウグアにキスをした。クトウルーの力で、ヤツを相殺させてやる。

そして、太陽の目を覚ましてやるんだ。

潰れたカエルみたいな顔のツアトウグアへ、唇を押し付ける。やたらと生臭い口のなかへ舌を入れた。ザラザラとした感触が伝わってくる。無数の小さな毛虫が、一斉に流れこんでくるようだった。

だがヤツの抵抗も一瞬だけだ。

俺の唾液を飲み込んだツアトウグアは、断末魔の悲鳴をあげる。

「く……くそお……」

腕のなかで悶えるツアトウグア。苦しげな声が聞こえる。

「これで……俺たちに勝ったと思うなよ。四大元素を司る邪神たちは……すでにこちらへ向かっている」

「ふん。なんでもこいよ。歓迎するぜ」

「強がってられるのも……今のうちだ。……奴らは強い。なんせ

俺は……四天王のなかでも最弱……」

「自分でいうなよ」

俺はツアトウグアを突き飛ばす。抱きまくらは鈍い音をたてて地面に倒れた。印刷されたプリンはまだ耳が尖っていたものの、ほとんど元の魔法少女に戻っている。

勝負はついたも当然だ。

一匹目の邪神討伐は上手くいったようだ。約二名、途中リタイアした奴がいるが初陣にしてはよくやった方だろう。

しかしあれだな。抱きまくらにキスしたのは初めてだったが、悪くないもんだな。ぜんぜん、作り物にしている感覚はなかった。太陽がハマってしまうのもわかる気がする。

そんなことを考えていると。

フーッ。フーッ。

抱まくらから、かすかに呼吸音が聞こえてきた。

「ちつ。ツアトウグアもしつこ……」

俺は、抱きまくらを見下ろし毒づく。そしてあることに気がついた。

抱きまくらから、血が染み出していたのだ。真っ赤な鮮血。ツアトウグアのものではなさそうだ。

「って、ことは。まさか！」

抱きまくらを持ち上げると、カバーをはずす。詰め込まれた本体の代わりに入っていたのは。

生身の女性だった。

「うっ」

思わず、えずいてしまう。まさかこの女性は。

「誘拐された声優ですよ。ニュースでやってたでしょう」

「お前が、やったのか」

ふらりと立ち上がる太陽へ、俺は訊いた。

「もちろんそうですよ。プリンを完全にするためには、必要なことでしたから」

さも当然とばかりに言う。

「中の人は、必要でしょう」

彼に悪びれた様子はなかった。確信犯だった。好きなキャラの抱きまくらには、声優が入っていて当然と言いたげな口調だった。

すると、背後から震える声がした。

「太陽……なにやってんだよお……」

銀河だった。やつは公園の隅に隠れていたようだ。

ちょうど少女悪夢からは離れた場所なので、俺たちの戦いは見えていなかったようだ。

銀河は震える声で言う。

「お前のようすがあまりにも不気味だったから、兄ちゃん。ずっと隠れてみていたんだ。そしたら、太一や女の子が来たところで、急に見えなくなつて。ずっと心配してたんだぞ」

太陽のもとへ、銀河が歩み寄る。

「しばらく見てたら、いきなり女の子がふたり飛び出してきて、その場に倒れちゃうし。俺、なにがなんだかわからなくて……。それで、やっと太陽の姿が見えたと思ったら……」

抱きまくらの中に閉じ込められた、声優を見下ろした。

「声優を誘拐するとか、お前。これはダメだよ」

「僕の愛を完成させるには、必要な材料だったから」

太陽は真剣な顔で言った。たいする銀河は、今にも泣き出しそうな顔で抱きついた。

「ごめんな。兄ちゃんが、お前の趣味わかってやらないばかりに俺さ、お前のこと理解できるよう努力してみるよ。いっしょにアニメを見よう」

「兄さん……」

「でも、その前に警察に行かないとな。人を誘拐したんだから、その罪は償わないと」

「……やはり。あなたは何もわかっていない」

銀河の体をぐいっと引き離すと。

太陽は、背中からナタを取り出した。プリンのコスプレ用に持っていたのだろう。太陽はナタを振り上げる。

「死んでください」

ナタを振り下ろした。

なにかの冗談かと思った。

しかし、ナタは本物で、銀河の脳天に食い込んだ。

血しぶきが、スプリングラーのように噴き出した。崩れた頭部から、脳梁をしたたらせながら、銀河はその場に倒れた。

冗談……じゃないのか。これは。

「あーあ。とんだ邪魔が入っちゃたなあ」

太陽は血まみれのナタをぶら下げながら、俺をみた。

「まあいいや。本番はここからだから。ねえ、太一さん。あなた言いましたよね。自分の手でシナリオを書き換えろと」

「あ、ああ……」

「僕はね書き換えますよ。自分のシナリオを、サロメにするんです」
「サロメ？」

「知っているでしょう。オスカー・ワイルドの戯曲です。ユダヤ王ヘロデの姪であるサロメは、愛する洗礼者ヨハネの首を欲しがった。彼女は切り落としたヨハネの生首に、口づけたことを咎められ、殺されてしまふんです」

「まさか、お前……」

太陽はふらふらと、プリンの抱きまくらに近づいていく。

ふいに、俺たちの周りの空間が、やけに暗いことに気づいた。少女悪夢だ。ツアトゥグアの力は、完全には消えていない。

「僕はサロメに憧れていたんですよ。だってそうでしょう。なんですよ。愛する人に口づけた、その罪で死ねる。それって素晴らしいことじゃないですか」

またしても、ナタを振り上げる。ツアトゥグアの最後の力なのだろう。グチャグチャに歪んだ土人形が、もたつきながら、太陽の周りを囲っている。

ほとんど意志を失った土人形は、太陽を敵と判断しているようだ。主のツアトゥグアに危害を加えようものなら、反撃するだろう。

いくら瀕死とはいえ、邪神の力を普通の人間が受けて無事なはずがない。

「太陽。やめろ」

「カーテン・コールですよ。さようなら」

ナタを振り下ろした。太陽は、抱きまくらの首を、声優ごと切り落とした。

首をひろいあげ、太陽がキスをする。

その途端、周りを囲っていた土人形が、いつせいに崩れかかっていった。

シューウウウウ。

少女悪夢が晴れていく。

ツアトウグアの気配は完全に消えていた。

そして抱きまくらも。太陽も。銀河も。

「おい！どこに行ったんだ。銀河！太陽！」

俺はやつらの名前を呼んだ。

すると。

背後に人影を感じた。

振り返ると、そこには、息を切らした実乃莉がいた。

「なにか、嫌な予感がしたんだよ」

「実乃莉……」

「邪神が現れたみたいだね。でも、さすが太一。いきなり倒したんだよ」

「そんなことよりもよ。いなくなっちまった」

「誰が？」

「銀河だよ。それに、太陽も」

俺がいうと、実乃莉はきよとした顔でいった。

「銀河……。それって、誰のこと？」

第二章・その七

ふざけている様子はない。

「なに言ってたんだ。銀河だって、銀河。いつもいっしょに登校してたじゃねーか」

「……ああ。太一の友達なんだよね」

「今さら何なんだ。実乃莉、とぼけているのか」

「ごめんね。銀河くんって人のこと、わたしはもう、思い出せないんだよ」

実乃莉は夜空を見上げながら言った。

「そういう天然は、正直いつて笑えねーぞ」

「あのね。少女悪夢の中で死んだ生き物の情報は、すべて消えちゃうんだよ。その生物が死んだ瞬間、少女悪夢のなかにいた人の記憶以外からは、ぜんぶ」

「じゃあ、なんだ。銀河や太陽のことは、あのとき少女悪夢の中にいた、俺しか覚えてないってことなのか」

「そういうことになるんだよ」

実乃莉は申し訳なさそうに頭をさげる。

「ごめんね。誰かが死ぬなんて、わたしも考えてなかったんだよ。だから、あえて言わなかったんだけど」

そのことを今さら責める気はない。ただ俺としては、銀河の存在がこの世から丸々消えてしまったことが信じられなかった。

「いやいや。やっぱり実乃莉の冗談なんだろう。ここ最近、ガチで冗談みたいなのが起きすぎてるからな。ツッコミどころを失っちゃまったぜ。銀河みたいな悪友、忘れたくても忘れらんねえよ。な、実乃莉だって覚えてるんだろ」

「ごめんね」

「おい。最近だってお前、弟の相談に乗ってたじゃねえか。その弟は太陽ってたんだ。知ってるはずだぜ。思い出してくれよ」

「……太一。ホントにごめんなんだよ。わたしには、もう、なんにも
思い出せないよ」

冗談を言っている顔ではない。

彼らの記憶は、俺以外の人間から消えてしまったようだ。

俺は地面に両膝をついた。神になったと浮かれていた自分がバカ
らしくなった。

身近にいる、大切な友人すら守れなかったというのに。

なにも考えられなくなり、真っ白になった頭の中で。

ふと。戦う前につぶやいた、翔子の言葉がリフレインした。

『何をやるにせよ、成り切る覚悟が必要でござる』

俺がクトウルの化身として成り切るには、人の死を背負う覚悟
が、必要なのだろうか。

第三章・その一

朝になり、妹のレンが起こしに来る。なにやら慌てた様子だ。

「お兄ちゃん！ お兄ちゃんってば！」

「なんだ。朝から騒がしいな」

「聞いてよー。すごいこと知っちゃった。病ってね、腋からなんだって！」

「は？ お前は何を言ってるんだ」

「だって、“病、腋から”っていうことわざが……」

「“病は気から”だ、バカ野郎」

寝起きでいきなり天然ボケをかます妹。得意のデコピンで小突いた。

「ふえーん……」

おでこを抑えながら、蓮は情けない声を上げる。

やれやれ。こいつはいつまでたっても賢くならないな。我が妹に呆れかえっていると、

「おーい！」

階下から、騒がしい親父の声が聞こえる。

「太ーい。はやくメシ、よそつてくれえええ！」

「うるせーよ」

朝メシをせがむ親父に毒づきながらも、俺はベッドから起き上がる。

いつも通りだ。

何も変わらない、国広家の朝。

俺は日課のとおり、メシをつくり、メシを食い、歯を磨き、制服に着替える。

「じゃあ。行ってくる」

たこわさを貪り食う妹と、母親の人形を愛でている親父に言って、俺は学校へと向かう。

見慣れた通学路を歩いていると、幼馴染と合流する。

「太一、おはようだよ」

「おはよう。なあ、聞いてくれよ」

実乃莉に、今朝の妹がかました天然ボケを聞かせる。『病は気から』と『病腋から』を間違えたトンデモ日本語力。

「まったく、レンちゃんらしいねえ」

「この前はもつと酷かったんだ。『滅私奉公』を『滅私暴行』だと思っただとよ。なんだよ、我を忘れるほど暴行するやつって。バーサーカーじゃねえんだから」

「あはは」

実乃莉が笑う。彼女にウケたことで気をよくした俺は、振り返って話を振った。

「なあ、お前もおかしいと思うだろ。銀河」

当たり前のように振り返る。

だが、そこには誰もいなかった。

そつだ。あいつは、もうこの世にはいないんだ。

少女悪夢に取り込まれた銀河は、存在ごと消えた。あいつのことを覚えているのは、この世で俺だけだった。

くそ。銀河にだって、譲れないものがあつたはずなのに。なんてあつけないんだ。

「銀河……太陽……」

誰に言うでもなくつぶやいた。

すると、目の前の空間が歪んだ。グルグルと渦を巻いている。

その渦の中心から、ふたつの人影が現れた。

銀河と、太陽だった。

「なんだお前ら。生きてたのか！」

俺は奴らに走り寄った。

そりゃそつだ。いきなり友人が殺されるなんて。いくらなんでも超展開すぎる。

だが。

歩み寄るふたりの体は、もはや生きている人間のものではなかった。

損壊し、爛れ、虫が湧き、血まみれで、糞と腐った肉を混ぜたような臭いを放ち、緑色の泡立つ汁を垂らしながら、俺に歩み寄る。彼らが動く度に、むき出しになった臓物がゆらゆらと揺れていた。

頭をかち割られ、ナタが突き刺さったままの銀河が言う。

「なんで……俺が消えなきゃならないんだよあ……」

続いて、泥にまみれた弟が、呪いのように呟く。

「僕はプリンといつまでいたかっただけなのに……」

ふたりは、崩れた肉体をずるずると引きずった。肉片を撒き散らせながら、俺に近づいていく。

「ここはなんか……。狭いところだなあ……」

「プリンと一緒にいたい……。プリンはどこにいるの……」

「ねえ、太一……。ここから出してくれよあ……」

「プリンに……プリンに会わせて……」

う、うわあ！

俺はふたりに弁解した。

「待ってくれ。俺だって、お前らを見殺しにしたわけじゃないんだ。存在ごと消えるなんて知らなかったし。俺も邪神と戦ったりとかさ、いろいろテンパッてたんだよ。だから、その……許してくれ！」

銀河は、俺を見据え、怒りに表情を歪ませながら言う。

「だったらさ……最後に一度だけ……実乃莉ちゃんに会わせてくれよ……」

「実乃莉に会いたいのか。あいつなら、ここにいますぜ」

俺は実乃莉がいる場所を向き直った。

そこにいたのは、甘ロリファッションの魔法少女だった。

「えっ、お前は」

振り返った先に、実乃莉はいない。代わりにプリンが立っていた。彼女は破裂した内臓からじわじわと血を流し、ナタを振り上げながら、甘い声で連呼した。「お兄ちゃん」「お兄ちゃん」「お兄ちゃん」

ん」……。

「や、やめろ！」

「お兄ちゃん。お兄ちゃん。お兄ちゃん……。」

「俺はお前のお兄ちゃんじゃない！」

「お兄ちゃん。お兄ちゃん……。」

「お兄ちゃん！」

ハッとして目が覚めると、枕元にはレンが立っていた。心配そうに、俺をのぞき込んでいる。

「びつくりしたよ！　なんと呼んでも起きないんだもん」

「ああ。悪かった」

さっきのは夢だったようだ。

起き上がり、頭を抑えながら言う。

「もう平気だから。先に下へおりてろ」

退室を促したが、蓮はまだ心配そうに俺を見ている。

「お兄ちゃん……。」

「どうした。大丈夫だって」

「あのね。さっきね。うなされるようにお兄ちゃん言ってたの」「何を」

「すごく苦しそうに、「俺はお前のお兄ちゃんじゃない！」って。それって、レンに言った？　お兄ちゃんは、レンのお兄ちゃんだよね」

不安そうに広げた瞳へ涙を溜めながら、蓮は顔を近づけてくる。

俺はその顔を、いつものようにデコピンしてやった。

「心配するな。俺はお前の兄だよ」

「よ、よかったあ」

一転して笑顔になったレンは、おでこを抑えつつ、スキップするように部屋を出ていく。

やれやれ。相変わらず変なことを気にする妹だ。俺の心配をする

くらいなら、近づいているラクロスの大会を心配したほうがいいのに。

しかし、いやな夢を見ちまったな。

俺はベッドから起きると、ある異変に気づいた。

箱が大きくなっていたのだ。

先日、ナイトゴーストに憑依された女の子が落としていった箱だ。拾ったときは、だいたい一辺が5センチくらいの立方体だった。

なのに今は、一回りほど大きくなっている。

そして表面に刻まれた五芒星の、中央にある横線が。

わずかに、曲線になっていた。

第三章・その二

通学路に登校する俺に、実乃莉があいさつをする。

「おはよう、太一」

「ああ。おはよう」

昨日のことがあったにもかかわらず、実乃莉はいつもどおり接してくれた。「記憶から消えた“銀河”という友達」については触れない方針のようだ。それが彼女なりの優しさなのだろう。

俺もできるだけ、実乃莉には銀河の面影を押しつけないようにした。

悲しんでいるのはお互いさまだ。人の死を覚えているのは辛いけど、忘れてしまうのもまた辛いかもしれない。

「そういや、実乃莉」

俺は気になったことを話した。

「この前、女の子を助けたときに拾った箱。なんか大きくなってたぜ」

「あの箱は、たぶんだけど。幻夢郷から運ばれてきたものだよ」

「どうしてわざわざ？」

「理由はよくわからないんだよ。でも、おそらく重要な意味があるんじゃないかな。大きくなったのはその前兆かもしれないんだよ」

実乃莉にも大きくなる箱の正体はわかっていないらしい。が、重要なものであるというし、もう少し様子を見てみることにする。

そんな会話をしているうちに、俺たちはルルイエ学園に到着する。上履きにはきかえ、教室へむかった。

教室内でも、やはり銀河の存在は失われていた。彼の席ごとなくなっていたのだ。

良くも悪くも、クラスで浮いていたため記憶に残りやすいキャラだったのに、誰一人として銀河を覚えているものはいない。

だが、ここで悲しんではいられない。まだまだ邪神は残っている

んだ。

それに、ただひとり銀河のことを覚えてる俺が、感傷的になったりしたら、銀河としても浮かばれないだろう。

国広太一にセンチメンタルは似合わないのだ。

「あつ。そうだ、太一」

チャイムと同時に、実乃莉が言った。

「今日の昼休みも、会議室に来てね」

「了解」

そこへ担任の教師が入ってくる。俺たちは、各々の席についた。出席をとるあいだ考える。とうぜん俺は、今さら邪神と戦うことを諦める気はない。それよりも、もっと大きな懸念が俺にはあったのだ。

練輪佐美。なぜか俺を敵視する、縦ロールツンツン女である。

そついたり俺は、あの女のことをよく知らない。あの派手な格好からして、まともな生活はしていないと思うのだが。

まず、彼女にはなぜ俺のことを嫌うのか、その理由を問いただす必要があった。

今日こそは勇気をふりしぼって、本人に直接きいてみることにしよう。

俺が授業中、そんな決意をしていると。吃音の激しい数学教師が、黒板の問題を解くための生徒を指名する。

「で、では、こ、この問題を。し、神世界……」

ん？ いま“新世界”って言わなかったか？

「し、失礼。し、新世界が垣間見えるくらいに、む、難しいこの問題を。く、国広太一くん。こ、答えてください」

数学教師の大げさな例えに、クラスメイトが、

「それってどういう意味だよー」

ドツと笑った。たしかに、例えとしては大げさすぎる。

とはいえ、本当にただの例えだったのだろうか。俺はいぶかしく思いながらも指定された問題を解いた。

昼休みになった。

俺は約束通り、コール・オブ。クトウルー部の会議室へと向かう。会議室に入るなり、先に来ていたくるみと翔子が言った。

「昨日は、お疲れ様ッス！」

「ツアトウグアの討伐、ごくろうでござったね」

ふたりとも満面の笑みだ。邪神を倒したことに満足しているようである。

やはり彼女のたちも、“ツアトウグアを倒した”という部分しかしか覚えていないらしい。なんともやるせない気持ちになったが、彼女たちに罪はない。

会議室にはふたりの他に、実乃莉と佐美。さらにもう一人、はじめて見る女の子がいた。賢しそうに開かれた瞳は、右目が茶色で、左目が赤い。オッドアイの娘。

歳はおなじくらいだが、この学校の子ではなさそうだ。そもそも格好がおかしい。彼女はメイド服を着用していた。髪をポニーテールにまとめた頭部には、ヘッドドレスを乗せている。

「いつからこの学校は、使用人を雇ったんだ」

俺は首をひねった。こんなに若いメイドをどうするつもりなんだろう。

と思っていたら、佐美が発言した。

「わたくしのメイドですわ」

「お前のメイドかよ」

こりや驚いた。たしかに育ちが裕福そうだなとは思っていたが、まさか出張メイドサービスを受けられる身分だったとは。

「こいつの家って、ずいぶん金持ちなんだな」

「佐美ちゃんのお父さんはね。もともと町の工場長をやってたんだよ。でも、あるとき趣味で“全自動卵割り機”を作ったら、それが

大ブレイクしちゃったんだよ」

「もはや一家に一台はかせないと言われている、アレか」

「全自動卵割り機は世界中で売れているからね。今や佐美ちゃんの場合は、年商数百億円を超える大企業だよ」

へー。そんなもので、年商数百億とはねえ。世の中なにが流行るかわからないもんだ。

「んで。このメイドさん。わざわざ会議室に呼んだってことは」

「私も、元・幻夢郷の住人です」

メイドは深々と頭を下げる。

「梅沢来夢と申します。かつてワンダーランドでは、『双子のディつめざわらうむ』として暮らしていました」

「ほう」

「よろしくお願い致します。太一様」

「そんな堅苦しくしないで、いいよ」

「いえ。これが普通ですから」

他人を“様付け”で呼ぶのが普通なのか。職業病みたいなものだな。呼ばれる方として慣れないが、無理して訂正させるのもかえって迷惑だろう。

俺は、来夢のメイド口調を受け入れることにした。

「こちらこそ、よろしくな」

あらためて見てみると、来夢のおっぱいは、えらくデカかった。メイド服のエプロンが窮屈そうに盛り上がっている。

「もはやこれは、巨乳の域を超え、爆乳に達しているな」

俺はついっつかり、感想を声に出してしまった。そのくらい迫力のあるおっぱいだったのだ。

来夢は表情ひとつ変えることなく、冷静に述べた。

「太一さんが巨乳だというのはそうなのかもしれないし、爆乳だというのはそうなのでしょう。実際に爆乳ではないとおっしゃるなら、私の乳は爆乳ではありません。それが、おっぱいというものです」

えらく論理的な話し方だった。オッドアイがカチカチと音を立てて、計算している気さえしてくる。

とはいえ、來夢の口調は冷淡でこそあったが、とくべつ怒っているというわけでもなさそうだ。彼女のクールさは、メイドの象徴であるヘッドドレスとよく似合っていた。

「しかしお前たち。頭に何かしら、付けてるよな」

「は？ あなた、そんなことも知らないの」

來夢とは打って変わって、怒りの感情をむき出しにした佐美が言う。

「それでよく、クトウルを名乗れるものですわ」

「そういわずに、教えてくれよ」

「しかたないですわね。このわたくしが、無知なタコ助野郎に教えてしんぜましょう」

タ、タコ助野郎……。

「よくお聞きなさい。わたくしたちの頭部を飾るもの。これらは『愛の触手細工【ラブクラフト】』と呼ばれるものですわ。ラブクラフトには、邪神の力を抑制する効果がありますの」

「なんで、わざわざ抑制するんだよ」

「邪神の力は強力なのですわ。幻滅郷で暮らすものが、力をもろに使ってしまうと、瞬く間に狂ってしまいますわ」

「でも、俺は平気だぜ」

「あなたは特別なんです。奇跡的な魔術によって、人間とクトウルの力が融合しているんですわ。でも、わたくしたちをはじめとする、幻滅郷に住む人間に憑依した場合は別。ですから、ラブクラフトで力を制御せざるを得ないわたくしたちは、分が悪いのですわ。でもわたくしたちには、『輝くトラペゾヘドロン』という物質が、心臓に埋まっておりますの」

また、聞いたことのない名前が出てきた。

「輝くトラペゾヘドロン？」

「ええ。もともと輝くトラペゾヘドロンは、幻滅郷と幻夢郷の均衡

を保つため、ふたつの世界の間に無数にあるのですわ。輝くトラペゾヘドロンの結界によって、ふたつの世界の移動は極めて困難になっておりますの。ですがあるとき、ある魔術師によってクトウルーが召喚された」

「俺に融合した奴だな」

「そうですね。そしてクトウルーが召喚された瞬間、輝くトラペゾヘドロンのひとつが、八つに砕けましたの。それらの破片は、幻夢郷に暮らしていた、八人の心臓に埋め込まれた」

「それがお前たちってわけか」

「輝くトラペゾヘドロンが埋め込まれたわたくしたちは、力を抑制した状態であっても、最大限のパフォーマンスを発揮することができますの。わたくしたちはさしずめ、『幻滅郷を守るために選ばれた八人の戦士』ってところかしらね。まあもつとも、わたくしは戦う気なんてございませんけれど」

「乗り気じゃないわりには、ずいぶんと詳しいな。頭の上に載せたティアラが、誇らしげに輝いていた。」

第三章・その三

あれ。でもこいつらって、幻夢郷からまとめて、こちらの世界に移動してきたんだろう。だったら、その逆もできるんじゃないか。
「いつそのことさ。一気に幻夢郷まで行って、アリスを説得したほうが早いんじゃないの」

「それは無理だよ」

実乃莉が即答する。彼女は胸の前で、大きなバツをつくっていた。
「わたしたちが移動したときは、クトゥールの召喚に便乗して亡命したんだよ。よっぽどのことがないかぎり、ふたつの世界の間にある、輝くトラペゾヘドロンの結界は超えられないよ」

「あー、だったらさ。こういうのはどうだ。こっちに來た幻夢郷のやつらを全員集めて、一気に渡るんだよ。そうすりゃ、何人かは向こうに行けるんじゃないか」

「そんな行き当たりばったりのやり方はダメだよ。それにね、彼らはこちらの世界にすっかり馴染んで、幻夢郷にいたことを忘れてるんだよ」

実乃莉はさみしげに言う。

「やっぱり、覚醒したままだと、夢の世界を忘れちゃうんだよ」
故郷を懐かしむように、遠くを見ていた。赤いリボンの下、長い黒髪がさらさらと揺れている。

目覚めと夢の世界をまたぐ彼女たちは、幻滅郷に住む者にはわからない葛藤があるのかもしれない。

ふいに、佐美が口を開く。文庫本をポケットにしまいながら言った。

「まあ、わたくしは。どのみち戦う気なんてありませんけどね」

「なんでそんな嫌がるんだ」

「わたくしには、事情があるのです」

「事情って、なんだよ。教えてくれよ」

「わたくしが戦いたくない理由。それは……」

佐美は、恥ずかしげに俯きながら言った。

「……わたくしは、普通の女の子として過ごしたいのですわ」

はい？ 佐美の戦いたくない理由って、そんなことだったのか。もつと重大な理由があると思っていた。

「がーはっはっは！」

思わず、俺は笑ってしまった。

「普通の女の子ってお前、そりゃ無理ってもんだらう。金持ちの家に生まれて、学校にメイドまで連れてきて、そのうえ魔導書がなんだ輝くトラペゾヘドロンがなんだっていうマニアックな知識が豊富だよ。もうお前は普通じゃねーよ！」

ゲラゲラと笑いながら言った。涙で視界をにじませながら、佐美を見る。

彼女は、顔を真っ赤にして震えていた。

「あつ。すまん」

悪いことを言ってしまったようだ。佐美の震えかたが尋常じゃない。これまでも十分すぎるほど怒っていた彼女だが、今回は限界をはるかに超えていた。

「誰のせいだと思ってるんですの！」

勢い良く立ち上がり、バタンツと机を叩く。

「あんたが……クトウルーが……輝くトラペゾヘドロンを八つに砕くから！ その破片をわたくしの心臓に埋め込んだりするから！

わたくしは普通の女の子として暮らせなくなっただんですのよ！」

「いや、それは不可抗力ってやつだよ」

「不可抗力もなにもあるもんですか！ あんたのせいでわたくしは女子高生という最高に輝かしい時期に、邪神と戦うようなはじめにはついているんですよ！」

たしかに気の毒なことだ。女子高生稼業をやりながら、邪神と戦うなんて。青春が台無しになる。

「もう、あなたの顔は見たくありません。いきますよ、来夢」

そのまま奥の部屋に行ってしまった。來夢は俺たちに一礼すると、すぐに後を追う。

一気に静まりかえる会議室の中。

「どうして太一は、佐美ちゃんを怒らせることばかりするんだよ」

「悪気があるわけじゃ、ねえんだよ」

俺は頭をかいた。

元・幻夢郷の人間といってもだ。誰もが故郷を守りたいというわけではないらしい。佐美のように、幻滅郷の人間として生きることを決意している奴もいる。

なかには、故郷から逃げてくる元凶となったアリスのことを、恨んでいる奴だっているかもしれない。

「あのさ。お前らは、どうなんだ」

会議室に残った、三人の女の子に向かっていう。

「みんな、戦うことに積極的みたいだけどさ。戦う理由を聞かせてくれよ」

実乃莉が、リボンの位置を直しながら答えた。

「わたしが戦うのは、単純だよ。ただ、幻夢郷を守りたい。それだけだよ」

「まあ、一番シンプルな動機だよな」

「でもね太一。それだけじゃないんだよ。わたしの戦う、本当の理由はね……」

「なんだ」

「……うつん。まだ、内緒だよ」

照れくさそうに微笑んだ。口元にえくぼが浮かんでいる。秘密の作り方が上手いやつだ。不覚にも、ドキッとしてしまったぞ。

「んで。翔子はどうなんだ。普通の女の子として暮らす気はなかったのか」

「拙者はフツーじゃないでござるから」

「そつみたいだな」

俺は納得して頷いた。いまどき、ござる口調で話すくらいだ。普

通に生きることを放棄しているとは思えない。

「それに太一殿。拙者はこう見えて、アリス殿のことを本気で心配しているでござる。アリス殿は気丈に見えて、内面には脆さを抱えているでござるからな」

「ガラスの心つてやつだな」

「それも、猛毒を塗ったガラスでござる」

翔子はニヤニヤと笑いながら言った。相変わらず、笑うところじやないときに笑っているやつだ。

「くるみ。お前は？」

「ボク、体動かすの好きッスから！」

「……え。それだけ？」

「他にどんな理由が必要ッスか」

シルクハットのつばを摘みながら、くるみは平然と言い放った。

こいつは邪神退治をただのスポーツと考えているようだ。豪傑というか、なんというか。

「そんなことよりも、太一さん。約束を忘れては困るッス」

「約束ってなんだ」

「とぼけないで欲しいッス」

両手を組み、くるみはウルウルとした瞳で、俺を見上げる。

「戦いが終わったら、いくらでもキスをするって約束したッス」

ゲツ。たしかに、そんなこと言った気がする。だがそれは、あの場を仕切り直すためにしかたなく言ったことなんだ。本気じゃない。なんとか弁解しようとしていたら、

「そんな約束してたの！？」

実乃莉が、ビックリした様子で立ち上がった。めずらしく怒っていた。

「わたしという幼馴染がいながら。なんて約束をしてるんだよ！」

「いや、それはだな……」

「不潔だよ、太一！」

頬をプクッと膨らませたまま、実乃莉は会議室を出て行ってし

まった。

誤解を解く時間はなかった。

「まったく、お前らが変なことというから……っておい！ 何をしている！」

気がつくと、翔子とくるみが、俺を左右から取り囲むようにして接近していた。ふたりとも、唇を突き出している。

「はやくキスをするでござる」

「やめろ。離れろって！」

「ん」。約束は守るでござるよ」

唇をせがむふたり。俺は、彼女たちの唇を振り払うために、残りの昼休みを費やした。

第三章・その四

けつきよく、放課後になっても実乃莉は口を聞いてくれなかった。ここのところ、女の子を怒らせてばかりだ。

このままではマズイ。俺は学校の帰り、彼女の家に行くことにした。

門前払いされてはかなわないと思ったが、実乃莉は俺を見るなり、「どうぞどうぞ」と気軽に自宅へ招き入れてくれた。

城座家に入るのは久しぶりだった。小さい頃はよく遊びに行っていたもんだが、中学を過ぎたあたりから、女の子の家に遊びに行くのに抵抗を覚えてしまったのだ。

実乃莉の家は、いかにも中産階級といった雰囲気である。慎ましくはあるが、品のいい花瓶やカーテンなど、ところどころに施された控えめな贅沢が、育ちの良さを物語っている。また、他人の家に特有の臭さみたいなものが、実乃莉の家からは感じられなかった。爽やかなフローラルの香りがする。

「あ、あのさ。昼間のことなんだが……」

俺が話しはじめると、実乃莉はニツコリと微笑んだ。

「へへへ。ほんとだね、別に怒ってないんだよ」

「そうなのか」

「太一のことだから、なにか事情があったんでしょ」

さすが実乃莉だ。俺が見込んだ幼馴染だけある。

「それにね。翔子ちゃんたちの気持ちもわからないわけじゃないんだよ」

実乃莉はうつむいた。少し恥ずかしそうに、自分の唇へ指を当てながらつぶける。

「わたしも、初めて太一にキスされたときはね。とろろんってなったんだよ」

「おい。止めてくれよ。昔の話だろ」

「わたしは今でも覚えているよ」

「よせて」

俺たちが、幼稚園の頃じゃないか。そんな懐かしい話を急に持ち出すなんて、反則だ。人はそれを黒歴史と呼ぶんだぜ。

あせる俺に、実乃莉が近づいて言う。

「ねえ太一。……またキスしてほしいんだよ」

「じよ、冗談はよくなって」

「今なら邪神も出てないでしょ。変身しないで済むんだよ」

「そうゆう問題じゃないだろ、実乃莉さん」

しどろもどろになりながら、彼女をそつと引き離れた。

俺になぜか備わる、キスの魔力。これを使えば、女の子はメロメロになる。

だが俺は、こんな力を乱用するつもりはないんだ。そりゃ小さい時はいい気になって使ったものだが、この年になれば物の分別というものがつく。

それに第一だ。実乃莉には、キスの力を使わずに、気持ちを伝えたい。

ここはなんとかして、話を切り替えなくては。

「そうだ！ お前さ、昼間に話したいことがあったんだろう」

「誤魔化さないでほしいんだよ」

「お前が帰っちゃうからさ。話、とちゅうだったろ」

はぐらかされた実乃莉は、つまらなそうに口を尖らせている。むくれているようだ。

だが、すぐに話を切り替えてくれた。

「うん。実はね。作戦をねろうと思ってたんだよ」

「作戦って？」

「佐美ちゃんに、戦いへ参加してもらったための作戦」

なるほど。それは大切な作戦だ。あのひねくれたお嬢さまに、なんとかしてやる気を出させよう。

あれだけ、邪神にまつわる知識が豊富なんだ。興味はあるはずに

決まっている。ひと押しすれば、ヤル気を出してくれるかもしれない。

俺たちは知恵を出し合った。二時間ほど、あーだこーだと評議する。

「ところでさ。俺の中にクトウルーって邪神がいるわけだろ」

「そうだよ」

「だけど俺は、他の邪神と戦ってるわけだ。人類のために戦うクトウルーを邪神と呼ぶのは、なんかこう、失礼じゃないか」

「クトウルーが邪なことには変わらないんだよ」

「ふつうに、“神”って呼んでもいいんじゃないの？」

「それはちよつと、おこがましいんだよ。せめて“邪邪神”と呼ぶべきなんだよ。」

「どういうことだ」

「邪神に対して、邪な神なんだから。邪邪神だよ」

「ややこしいな」

後半は、ただの雑談になってしまっていた。

けっきょく俺たちは、佐美のやる気を高める妙案が浮かばなかった。夜も遅くなり、夕食の準備をしなくてはならない時間になる。

「そろそろ帰らないとな」

「じゃあ、玄関まで送るんだよ」

実乃莉が立ち上がる。そして、壁のカレンダーをみて呟いた。

「あ。大変なことを忘れてたよ」

「どうした」

「明後日は、佐美ちゃんの誕生日だよ」

俺は指をパチンと鳴らす。

「それは使えるな。豪勢な誕生日パーティを開いて機嫌をとればいいんだ。アイツ、おだてられるのに弱そうだしな。ヨイショしまくればすぐ乗り気になるさ。ちよつと土曜で学校も休みだ。いいアイディアだろう」

「悪い案では、ないと思うけど……」

実乃莉は乗り気ではないようだ。おかしいな。いいアイデアだ
と思ったんだが。

「なにか欠陥でもあるのか」

「そうじゃないんだけどね。わたし、明日からしばらく出かけるんだよ」

「旅行か？」

「ま、そんなところだよ」

となると、実乃莉なしでのパーティーになる。残念だな。実乃莉がいれば、いいまとめ役になったのに。

「プレゼントは用意しといたから、渡してほしいんだよ」

俺はリボンで可愛らしく包装された箱を受け取った。

しかたない。俺はあまり人をおだてるのが得意じゃないんだが。せいっぱい、接待するか。

とりあえず作戦は浮かんだ。俺は実乃莉に見送られながら、家へと向かった。

第三章・その五

翌日。

昨日言っていたとおり、実乃莉はこない。旅行にいくとか言っていたな。なにもわざわざ学校を休んでまで行かなくてもいい思うのだが。期間限定のイベントでもあるんだろうか。

俺は通学路を、ひとり歩く。ひとりで登校するのは久しぶりだった。のびのびとした気持ちにはなれるが、やはり物足りないものだ。ルルイ工学園に到着する。校門へ入っていく佐美の姿が見えた。声をかけようと思ったが、少しためらう。いまへたに刺激したら、かえって心証を悪くしかねない。

それに、メイドを付き添えた彼女には、近づきたいオーラがあった。誕生日パーティーの報告は、昼休みまで待とう。

しかしあのメイドの雰囲気、きのうと少し違う気がする。

無事に昼休みをむかえた俺は、会議室へ向かった。

室内には、佐美とメイドしかない。

佐美は相変わらずの仏頂面で、文庫本をにらんでいた。くるみと翔子の姿はみえない。

おそらく、いつもは実乃莉が声をかけているのだろう。佐美にいたっては、この部屋をほぼ私有化している様子だ。

メイドを正面から見たとき、やはり今朝の直感が間違いではなかったことを知る。昨日のメイドとは、服装も、髪型も、頭に載せたヘッドドレスも一緒に、かつオッドアイだった。しかし今日のメイドは、左目が茶色で、右目が赤。来夢とは逆だった。さらに強いて言えば、今日のメイドのほうがじゃっかん垂れ目だ。

「妹の檸檬と申しますです。ワンダーランドでは、【双子のダム】をしていましたです」

今日のメイドが頭を下げる。屈んだとき、さらに來夢と違う点を発見した。

「胸がさらにデカいな」

俺は声に出して品評した。

「姉も凄かったが、妹は輪をかけてデカい。姉が爆乳なら、こちらは魔乳といったところか。邪神の力を使うのにふさわしい」

「ま、まじまじと見ないで下さいです……」

「ふむ。なるほど。かつて文学者の梶井基次郎が、檸檬から爆弾を連想していたな。初めて読んだ時はなにを言っているのかと思ったが、その理由が今、わかった気がするぞ」

「それって、違うと思いますですよ……」

俺たちの会話を聞いていた佐美が、軽蔑した目で言う。

「あなた。わたくしのメイドに、胸以外注目することはありませんか？」

おっと、そうだった。おっぱいどころではない。誕生日パーティーの開催を伝えなくては。

俺は佐美に向け、本題を切り出した。

「お前、誕生日が近いんだろう。物で釣って機嫌を取りたいんだが、なにが欲しい？」

「ちよつ。他に言い方はありませんの」

「遠回しに言うのは嫌いなんだよ」

「まったくデリカシーの欠片もない。だいたいね、わたくしは大抵のプレゼントでは満足できなくてよ」

考えてみれば、佐美の家は金持ちだった。これは計算外だ。たいした収入のない造形家の息子で買えるようなシロモノで釣るのは、ちと厳しいか。

「ちよつと、お耳を拝借しますです。太一さま」

「なんだ？」

檸檬が俺を手で招く。なにかネタを握っているようだ。俺が耳を近づけたところで、

「ダメよ！」

ものすごい剣幕の佐美が怒鳴った。なんかもう、佐美に怒られるのは慣れてきたな。だが檸檬は、ご主人様の怒鳴り声にすっかりビビってしまった。泣きそうなくらい怯えている。

「もしあの話を話したら……あんたとは一生口きかないんだから！」子供のケンカみたいだ。怒るにしたってもっと方法があるだろう。しかし檸檬はというと、相当ショックを受けていた。口をかたく閉ざしてしまった。そんなに、佐美と話せなくなることが悲しいのだろうか。俺にはそんなデメリットにも思えないのだが。

こうなってしまうては、檸檬から聞きだすのは無理だろう。惜しいな。なにか重要な秘密を握っていそうなんだが。

佐美のプレゼント選びに有力な情報を得られないまま、予鈴が鳴ってしまった。昼休みは終わりである。

教室に戻るため立ち上がる一同。ふいに檸檬が言った。

「太一さん。よろしければ、今日の放課後、付き合ってくださいです」

「ん。なにをするんだ」

「メイド服を新調しようと思いますです。よかつたら、ご一緒に選んで欲しいです」

「俺は構わないが。佐美の付き添いはいいのか？」

佐美に訊くと、彼女は縦ロールをくるくる回しながら答えた。

「わたくしも、構いませんわ。わたくしはメイドがいなくてもやっていきますから」

佐美の了承も得たことで、俺は檸檬とメイド服選びにでかけることになった。

教室にもどった俺は、授業中、ふと考えた。

メイド服って、どこで売ってるんだ。

放課後になり、俺は待ち合わせの校門へむかう。先に待っていた

檸檬と合流した。

檸檬はウキウキとした様子で、足早に歩き出す。向かった先は商店街の方面だった。

「なあ、檸檬。商店街に、メイド服を売ってる店なんてあったか？」

「ありますですよ」

スキップしながら進んでいく檸檬。彼女の格好はとても目立つので、周囲の注目を集めていた。できればもう少しおとなしくしてもらいたが、服を新調できるとあって彼女のテンションも上がっているようだ。水を差すのは悪気がしたので、黙っておく。

俺たちは、とある店の前に立った。看板にはこう書いてある。『

コスプレショップ デビルズ・リーフ 』

「ここって……」

「コスプレショップです」

「いや、お前の場合コスプレじゃないだろう」

本職じゃないのか。

だが檸檬は気にするようすもなく、小走りで店内へと入っていった。はしゃぎすぎたのだろう。段差のない場所で、なぜか足を引っかけ転んでしまう。

どんがらがつしゃーん。彼女は店内のマネキンをなぎ倒していく。

「うう。ごめんなさいですう」

檸檬はすぐさま、倒れたマネキンを起き上がらせていた。涙目になりながらつぶやいている。

「私ドジだから……。メイドに向いてないですよお」

「いや。天職だと思っぞ」

俺は言った。その言葉を聞いた檸檬は、一気に晴れやかな顔になる。メイドとして認められたことが嬉しかったのだろう。

真意がどれほど伝わったのかは、わからなかったが。

第三章・その六

ショップ内に入ると、なぜか包帯ぐるぐるの店員がいた。アニメのコスプレかなにかだろう。重傷患者みたいになかつこつで、棚を整理している。

店員の趣味なのか。それとも、この手のお店だけに浸透している通過儀礼かなにかだろう。大リーガーの新人は、ロッカーにあるコスチュームを着なくてはならないと聞く。コスプレショップでは包帯デビューが当たり前なのかもしれない。

気になるな。オタク趣味があると言っていた翔子も、つれてくればよかった。

俺がまじまじと見てみると、視線を感じたのだろう。店員が俺に近づいてきた。手にはカタログを持っている。

「お客様。なにかお探してでしょうか」

「いや。俺は付き添いでな。コスプレをする気はないんだ」

「そうですか」

残念そうに、店員はカタログをしまった。別にコスプレの趣味は否定する気はないのだが、俺が他人の格好をするというのには抵抗がある。俺は、俺以外の何者にもなるつもりはない。

檸檬はというと、真剣な眼差しで二着のメイド服を見比べていた。どちらもたいして変わらないような気がするのだが、檸檬にとつては重要な相違点なのだろう。なかなか優劣をつけられずにいる。

俺は檸檬に近づいて言った。

「たまには、メイド以外の服も着たらどうだ」

奥のほうにあった、ボンテージの衣装をさしだす。

「こつこつのかさ」

「こんなの恥ずかしいです！」

「いいから。たまには従える側になってみるつて」

無理やり押し付けた。檸檬は嫌がりながらも、けっきょく押しに

負けて着替え室へと入っていく。

しばらくしてから、着替え室のカーテンが開いた。出てきたのは、女王様ルツクの檸檬である。

「うむ。なかなか似合っているぞ」

「そうかなあ……です」

「ちよつと、女王様つぼくしてみてくれ」

檸檬は、少し考える。女王様用にボキヤブラリーが極めて少ないのだろう。

戸惑いながらも、彼女は網タイツの足を差し出しながら言う。

「跪いて、足をお嘗めくださいです！」

「なんか違うな」

途中まではそれっぽかったんだが。

「女王様が敬語じゃダメだろう」

「そうはいわれましてもです」

「もつとこう、ビシツと言わないと」

「ふええええん……」

移動するうちに、涙目になっていく檸檬。これじゃ立場が逆だった。

「ちが明かないので、彼女にはメイド服に着替えてもらうことにする。」

「やっぱり檸檬はメイドのほうに向いてるな」

「そうですよね」

女王様講座から解放された檸檬は、うれしそうに言った。

「ところで太一様。こちらのメイド服、どう思います」

「いつもと一緒じゃないのか」

「違いますよ。ほら、スカートがいつもよりもヒラヒラしてますです」

檸檬に言われて、スカートの裾を確認してみる。たしかにヒラヒラはしているが、別段いつものと変わらない気がする。

彼女はなにか期待を込めた目で俺を見ていた。

「どれがいいのか。男の人の意見を参考にしたかったです」

「そんなに違うなと思うがな」

「でも、ヒラヒラが多いです。男の人は、そういうの好きですよね」

「どうだろうな。だいたい、メイド服って男の欲求を満たすために着るものではないだろう」

たぶん。

参考になるアドバイスを聞けなかった檸檬は、がっかりした様子だった。またしても、二着のメイド服を見比べている。

なにか気の効いたことを言わなきゃならない雰囲気だ。しかし、ファッションに疎い俺が、おしゃれにコメントできるはずもない。

「まあ、あれだよ。檸檬はメイド服なら、なに着ても似合うよ」

テキストなことを言ってしまった。しかし檸檬は、やたらと喜んだ様子で、

「本当ですか！　うれしいですう！」

そして、最初に選んだヒラヒラ増しの方を選んでいた。

こんな口からでまかせみたいな褒め言葉でよろこぶとは。素直なのはいいんだが、単純すぎやしないだろうか。悪質なサギとかに騙されそうでちよつと心配だ。

あまりのピュアさ加減に、檸檬を直視できなくなった俺は、店内をぐるりと見回してみた。壁には、コスチュームを試着した客のポラノイド写真が飾られている。写真を撮ることで割引が効くというサービスらしい。もつとも、女性限定と書いてあるが。

写真には、さまざまなコスチュームがおさめられている。被写体の客たちには、やはり照れがあるのだろう。ちよつと恥ずかしそうにしているのが大半だった。

そんななか、ひとときわノリの良い常連客がいた。店内にある写真のほぼ半分を占めるその客は、いきいきとした表情でバツチリとポーズを決めている。

「ん。この顔、どつかで……」

見覚えのある顔を、俺は凝視する。そしてある人物の名が思い浮

かんだ。

「こいつ、佐美じゃねーか！」

あのツンツン縦テール娘だ。いつも仏頂面をしてるから、すぐには気が付かなかった。

「は、はうう。バレてしまったです」

檸檬が慌てている。昼間、口止めされていたのはこの趣味のことだったようだ。

しかし隠したい趣味の写真を、こんな無修正でさらけ出しているなんて。佐美のやつ、ガードが硬そうで、詰めが激甘だった。

「それにしても、何だこの量は。写真集でもつくるつもりか」

「ご主人様は、コスプレ姿を撮られるのが、大好きなんです」

明らかに趣味として撮っているな。金持ちのアイツが、割引を目当てにするわけがない。

「実は頼まれていたコスプレがあるです」

檸檬は一枚のメモ帳を取り出した。そこにはびっしりと、衣装が書き記されている。

メモを片手に、檸檬はコスチュームを物色していた。

ふと、ある衣装の前で止まる。

青色の、ドレスだった。

「どうした。それも頼まれたのか」

「違います」

遠い目で、檸檬は言う。

「幻夢郷のことを思い出していたです。アリスは、いつもこんな格好をしていたですから」

そうなのか。俺はもっと座敷わらしみたいなのを想像していたんだが。アリスって、結構ハデだったんだな。

佐美に頼まれていた、大量のコスチュームの購入を終えた檸檬。しかしその量はすさまじく、ダンボール二箱分はあった。

「持って帰れないです」

「でしたら、宅配しますよ」

包帯まみれの店員が言う。檸檬は渡りに船とばかりに答えた。

「ぜひ、お願いするです」

「いつもお世話になっていきますからね。送料は無料で結構ですよ」

「ありがとうございます」

「それでは、手配いたします。到着は明日の午後になりますね」

店員は、檸檬が書いた住所を確認しながら言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4800z/>

邪神のディープ・キス ～ワンダーランドは眠れない～

2011年12月21日17時34分発行